

## ジッドのウィリー・スキュルマンス宛書簡 : ベルギー人愛書家との交流

吉井, 亮雄  
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2556322>

---

出版情報 : Stella. 38, pp.307-350, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# ジッドのウィリー・スキュルマンス宛書簡

——ベルギー人愛書家との交流——

吉 井 亮 雄

ジッドは生涯に2,300人を超える文通者と総計3万通以上の書簡を交わし合ったが、その相手はなにも親しい友人・知己や文壇の関係者、各界の著名人たちがばかりだったわけではない。むしろ知名度が上がるにつれ、彼のもとには無名の読者、若き信奉者からの便りが数多く届くようになる。これらの呼びかけに対し、つねに新世代に希望を託していたジッドは驚くほど小まめに応接した。自身の手紙の価値に若干の疑問符を付しながらも、彼がかくのごとく多くの文通を続けたのは、今やクロード・マルタンと並び立つ斯界の第一人者ピエール・マッソンが言うように、人生の諸要素を記録する『日記』が作品創造の「母胎」<sup>マトリス</sup>、彼の精神内部へと向かう求心的な運動体であるとすれば、いっぽう文通の実践は、他者の力を借りた素材豊かな「実験室」<sup>ラボラトワール</sup>、人生の別の諸要素を外側へと拡散する補完的な運動体として、『日記』に劣らず作品創造に不可欠な要素だったからであろう<sup>1)</sup>。

本稿ではそういった文通の実例として、ジッドが1920年代、ブリュッセル在住の医師ウィリー・スキュルマンス (Willy Schuermans) に宛てた書簡群を補説をまじえて紹介したい。後述するようにこのベルギー人は、ジッドを介してヴァレリーやジャック・リヴィエールらとも交流のあった人物だが、具体的な経歴については残念ながらほとんど不詳。わずかに知られるところでは1889年の生まれ (没年は1978年)、開業医として生計をたてる傍ら、一時期は大学病院での診療も兼務したらしい。同時代のフランス文学の熱心な読者であったことがジッドらとの交流の機縁となったが、後年売り立てられた蔵書の内容を見るかぎり<sup>2)</sup>、「愛書家」<sup>ビブリオフィル</sup>ではあっても、俗に言う「蒐書狂」<sup>ビブリオマニア</sup>などでは決してなかった。自筆原稿や豪華紙刷り刊本 (多くは著者の自筆献辞入り) を瀟灑典雅な装丁で飾ったコレクションなどとは異なり、出品アイテムの大半は仮綴じ本、

ジッドやヴァレリーからの献辞入り著書若干数が目を惹くものの、そのほかは限定版にしても局紙や中国紙などの最上質紙ティラー・ジュ・ド・テット刷りはごく僅かしか見当たらない。世に本を読まぬ蒐書家は珍しくないが、彼の場合はまさに日々手にとりひもと繙くための蔵書だったのである。

さて、当該資料体は活字化されてすでに久しいが、今回あえてその日本語訳を補説とともに提示するのは次のような理由による。すなわちジッド書簡36通を収める刊本は、作家没後の1955年、スキュルマンズの同意ないし依頼のもと、ブリュッセルの著名古書業者ラウル・シモンソンが版元を伏せて印刷した25部限定の私家版<sup>3)</sup>、しかも解題や註の類は一切なく、一般の手に届きにくいばかりか、書簡の記述そのものについても精確に内容を把握可能であるか甚だ疑わしいからである。なお、資料体には刊本収録から漏れていたジッドの未刊書簡1通[25 bis]を加える。またスキュルマンズのジッド宛には遺漏も少なくないが、補説にあたっては残存する14通(すべて未刊)に適宜言及する。

\*

1920年の秋、30代に入ったばかりのスキュルマンズは、匿名で上梓された私家版『一粒の麦もし死なずば』(以下『一粒の麦』と略記)の存在を人伝ひとづてに知り、その入手を願ってジッドに直接問い合わせる。彼が送った手紙は保存されていないが(以後の数通も同様)、次が作家からの返信――

《書簡1》

〔パリ、19〕20年11月4日〔木曜〕

拝略

どうしてあなたのお手紙を不愉快あるいは無遠慮などと思えましょうか。無遠慮なのはあなたではなく、この出版のことを告げたであろうお友だちのほうです。「原則的には」それは内密のものであるはずでした。しかし私としてはこの出版が長きにわたり秘密のままであるとも考えてはおりませんでした。

あなたの率直さを受けて私も率直になり、忌憚なく事情をお話ししましょう。

この回想録は、遺憾ながら――やむをえぬ削除のためその性格がすっかり変質してしまうのを嘆きつつ――断章をいくつか『新フランス評論』に載せたものですが、今秋、全文が一巻本として刊出したのです〔実際はすでに5月に刊出〕。

全著作のうち最重要と見なすものを廃滅させたくないという願望から、私はこの出版に踏み切りました。しかしその一方で、時期尚早の公表・流布への懸念から12部を超える印刷を思い止まったのです。当初の考えは友人数名の個人蔵書に限定した部数

にすることでした。だが結局のところ、友人の数は12名には達することはありませんでした。また私はすでに残部の内1部のある著名な蔵書家に譲っています。この人物のところなら秘匿され、好笑的な関心を逃れられることを知っていたからです。

この愛好家は印刷費の半分を負担したうえで、自分用の1部の代金として、口にするのも憚れるほどの金額を私に支払いました。それほど多額ではありましたが、かといつてもう1部をこれより安価で譲るとすれば、彼にたいし礼を欠くことになりましょう。私があなたにお答えするのに戸惑うのはそのためです。私の著述にたいするご関心を満たすような別の版が遠からず、とお知らせできれば好いのですが、その版がはたして私の存命中に出来るものやら。あなたのお示しくださるかくも心地よき共感にたいし、もっと懇ろに感謝の意をお伝えできず心苦しく存じます。せめて私のご好意にいたく感じ入っておりますことをどうかご承知いただきたく。敬具

アンドレ・ジッド

第3段落にあるように、『一粒の麦』はまず「断章」のかたちで1920年2月から5月まで3回『新フランス評論』に掲載され、さらに私家版出来後は、この11月にも4番目の断章が誌面を飾っている（以後、12月号・翌年1月号にも分載）<sup>4)</sup>。だがスキュルマンズは、ジッドに問い合わせた時点ではおそらく最初の3つの断章しか承知しておらず、しかも省略記号の存在から「やむをえぬ削除」を見て取っていただけに、なおのこと遺漏のない完全版テキストの入手を望んだのであろう。

『一粒の麦』私家版は、出版費用の調達を含め、同性愛弁護の書『コリドン』の私家版第2版とほぼ並行して進められたものだが、書簡の補説として手短にその間の経緯を述べておこう<sup>5)</sup>。

かつての盟友アンリ・ゲオンの回心や相次ぐ友人・知己の戦死など、陰鬱な状況も禍して1916年以降、深刻な宗教的危機がジッドを襲っていた。マルク・アレグレ青年との恋愛はそれまでに経験したことの無い霊肉ふたつながらのものとなり、それだけに妻マドレーヌとの関係は決定的に悪化してしまう（そこから生まれたのが1919年刊の『田園交響楽』であることは言わずもがな）。まさに人生最大の苦難に耐える数年であった。この危機を契機として彼は己の内心の吐露、とりわけ性的指向の表明を不可避の課題と考えはじめる。

1918年の夏、ジッドは秘匿性を最優先にわずか4～5部に限定した回想録の出版を計画し、資金提供者として、すでに彼の自筆原稿数点を購入していた服飾界の大御所ジャック・ドーセとの交渉に入るが、戦時ゆえの不透明な先行

きを案じた後者はこの申し出を断り、計画はたちまちにして頓挫した。しかしその数カ月後、事態は新たな展開を見せる。イギリス出版界の大立て者を夫に持つレディー・ロザミアと、彼女が庇護していた作家志望の青年ポール・メラルが同書私家版（この段階ではタイトルは未定）の版權を 19,000 フランで買い取る契約に応じたのである。このことを知り、俄然蒐集欲を掻き立てられたドゥーセは、自分にも 1 冊予約させて欲しいと申し出る。この希望は、彼がイギリス人女性とともに、もうひとつの計画の経費、すなわち 1911 年に前半だけが 12 部限定の私家版として刷られていた『コリドン』<sup>6)</sup>の増補改訂版（今度は 21 部限定）の出版費用をも負担するという条件で承認される。3 者間の契約が交わされたのは 11 月 11 日、奇しくも休戦協定調印当日のことであった。

だがジッドとしてはこれら 2 冊の出版にまったく躊躇い<sup>たためら</sup>がなかったわけではない。迷った末に、意を決してレディー・ロザミアに契約の解消を願<sup>て</sup>い出、版權料全額を返却したのである。次いでドゥーセからも予約放棄の同意を得ようとしたが、交渉事に長けた蒐集家は正式に交わされた契約を盾<sup>すべ</sup>に取ってこれを拒否。事ここに至ればジッド側に抗う術はなかった。かくてドゥーセは、後掲《書簡 2》の記述を信じるならば『一粒の麦』上巻（12 部限定）1 冊の代価として 5,000 フラン、またそれに続き『コリドン』増補版の出版費用の半額として 2,275 フランを抛出し、やがて 2 冊の稀観本を手にするようになるのである。計画の成就にさいしジッドの方でもそれなりに恩義を感じるころがあったのだろうか、30 部程度を除き大半が廃棄されていた『田園交響楽』の初版（通称 «véritable originale»）を<sup>7)</sup>、また後には『一粒の麦』下巻（13 部限定）をそれぞれ 1 部ずつ、おそらくは無償でドゥーセに譲っている。

なお推定の根拠は稿末の註に回すが、『一粒の麦』私家版の存在をスキュルマンに教えた「無遠慮な友人」（書簡第 1 段落）とは、ブリュッセル在住で、すでにジッドから『コリドン』の第 2 版を贈られていた同性愛指向の青年詩人ルネ・ミシュレのことだと思われる<sup>8)</sup>。

上掲書簡にたいし、スキュルマンは『一粒の麦』私家版への強い関心を再度ジッドに伝えている。これに応じて後者の曰く――

### 《書簡 2》

[パリ, 19]20 年 11 月 14 日〔日曜〕

拝略

重ねての懇切なお尋ねに感じ入るとともに、ひどく当惑しております。

この本を差し上げることができるならば、どれほど喜ばしいことか。せめては、かくも率直に関心を示してくださることへの返礼として、直近のブリュッセル旅行の折りに『一粒の麦もし死なずば』を持参し、あなたにその内容を知っていただければ何と嬉しいことでしょう。だが一読なされば、私と同様、おそらくあなたはこの本にはドゥーセ氏が支払った5,000フランの値打ちなぞないと判断なさるでしょう。しかしながら、それでもなおご所望とあらば、ましてやこの本については口外しないと確言いただいたかぎりには——というのもそれが人の手から手へと渡るのはひどく不愉快なことでしょうから——込み入った話をしてしまっただけに、今更お断りするわけにも参りますまい。

しかし再度申し上げますが、作品を知るだけで事足りるということであれば、心から喜んで持参し、何日かお手元にお預けいたします。

いずれにせよ、お示しくくださる共感の念にいたく感じ入る次第です。敬具

アンドレ・ジッド

書簡の内容についてはとりたてて補説の必要はあるまい。ただひとつ、ドゥーセが負担したという5,000フランが当時どの程度のものであったのか、参考までに触れておくと、たとえば新フランス評論出版の「ブランシュ白色叢書」(赤と黒の細い枠囲みに *nrf* とロゴの入った淡いページュ色の表紙でお馴染み)が1冊3フラン50から5フラン、『フィガロ』紙が1部10センチームであったから、現在の邦価に換算すれば数百万円といったところか。

スキュルマンズが日を置かず送ったはずの新たな手紙は保存されていないが、ジッドは次の短信(古写本の絵ハガキ)をもってこれに答えている——

《書簡3》

[パリ, 19]20年11月19日〔金曜〕

拝啓

あなたは私にこの上なく魅力的な手紙を書いてくださいました。

私が約束を失念することなぞない、そうお信じていただきたく。

アンドレ・ジッド

「約束」とは言うまでもなく、刊本献呈とまではいかずとも、スキュルマンズが『一粒の麦』を読みうるように取り計らうということである。

その後、年が明けてしばらくすると再びブリュッセルから来信。その文面がどのようなものであったかはジッドの返書からおおむね推測できよう——

《書簡4》

[パリ, 19]21年2月2日〔水曜〕

拝啓

魅力溢れるお手紙を頂戴しました。そこに示された共感のお気持ちにどうすれば感じ入らないでおきましょう。それだけに嗚呼、最も簡単で好ましい方法は、あなたにこの本を心を込めて差し上げることでしょうが、それが叶わず実に残念です。私の思うに、あなたはこの刊本の意義を過大視なさっているのではないのでしょうか。雑誌に載せられなかった部分は、私の目から見ても、おそらくは最も重要なところですよ。しかし篤とご承知あれ。私の回想録の内この巻に盛り込まれた部分は——17年目までの部分は——いわば後続の章の導入として書かれたにすぎないのです。その後続章のいくつかはすでに執筆済みですが、この巻には入っておりません。幸いにもブリュッセルでお会いできた折には、おそらく私も勇気を奮い立たせて、その何頁かをご覧に入れることでしょ——お約束した第1部を読んで、あなたがぞっとなさらないならばの話ですよ。いずれにせよ、件の本は可能ながざり長く、つまりおそらくは相当長期の予定で、あなたのために取りおく、そうしかとお信じいただきたく。敬具

アンドレ・ジッド

「雑誌に載せられなかった最も重要な部分」とは、いくつかの削除のなかでもとりわけ幼年期の自慰行為を語った回想録冒頭を指していよう。しかし仮に無削除版であったとしても、総じて穏当な内容のこの前半部（第1部8章まで）は、赤裸々な性的告白を少なからず含む「後続の章の導入」にすぎなかったのである。

後述するように、スキュルマンズは6月中旬、ブリュッセルを訪れたジッドと初めて会い、「執筆済みの後続章のいくつか」を直接読み聞かされることになるが、当面話題に上っている私家版上巻にかんしては、書簡が示唆するように一時的な貸与のかたちで内容を知ることになったものと思われる。じじつ彼の旧蔵書競売目録には、後にジッドから寄贈された下巻の記載はあるが上巻のそれはない<sup>9)</sup>。

上掲書簡に続くのは3カ月後の5月9日付スキュルマンズ書簡<sup>10)</sup>。これがジッド宛のうち保存の確認された最初のもののだが、その内容を要すれば以下のとおり——。その後何カ月も経ちますが、あなたとの出会いは依然として叶わず残念至極。とはいえ『新フランス評論』掲載の見事な「アンジェルへの手紙」を読んで、ヴァレリーとプルスにたいするあなたの賞賛の念を知りえたのは、私も両作家をことのほか高く評価する者だけに、何と大きな喜びだったことか。『新フランス評論』を活気づけるにはあなたのご寄稿が不可欠ですが、出版社としては順調であっても、雑誌としてはこのところ衰弱し、若返りの努力も実を結んでいないように思われます。あなたのような永遠の若さを備えた若

き才能の発掘が急務でしょう。ところで新作の進捗はいかがですか。『贗金つかい』の完成は何時ごろのご予定でしょうか。「日付のない日記」や「アンジェルへの手紙」の単行出版をお考えでしょうか。待ち遠しいかぎりです。また今や入手難となった『アンドレ・ワルテル』『アミンタス』の再版が切望されます。一日も早くお会いできることを願いつつ、云々。

この書簡からは、ジッドがスキュルマンズに2年ほど前から準備中の『贗金つかい』（1925年付、翌年2月刊出）についても語っていたことが分かる。またスキュルマンズが言及する著作のうち、同年3月から6月にかけて『新フランス評論』に連載された「アンジェルへの手紙（«Billets à Angèle»）」は、四半世紀近く前に『レルミタージュ』誌に連載された«Lettres à Angèle»に做った文芸時評で、ジッドがヴァレリー、とりわけプルーストを賞賛したのは5月1日号。かつて『失われた時を求めて』の評価を過ったことへの悔悟と釈明に始まり、この作家の「重要性」を縷々強調している。

ジッドの返信は文通者の賛辞に感謝しつつも、その『新フランス評論』批判にたいしては穏やかに反論する――

#### 《書簡5》

[パリ, 1921年] 5月13日 [金曜]

拝啓

私に会うことを諦めないでいただきたい。

6月にはブリュッセルに赴くつもりでおりますし、あなたには必ず前もってお知らせします。

拙稿「アンジェルへの手紙」を気に入っていただけて幸いです。それについてのご意見にも大いに心動かされました。しかしながら『新フランス評論』にかんするご判断には、それにも劣らず強く感じ入ったという気がします。このご判断が正当であるか私としては確信するに至っておりません。おそらく〔以前は〕正しいものだったのでしょうが（そして、あなたが話題にしておいで「アンジェルへの手紙」〔4月1日号掲載分〕のなかで、私が同誌のことをいつも全面的に認めていたわけではない、そう匂わせたのも間違いだった訳ではありませんが）、実のところあなたは、ご自身の判断が数カ月来その正当さを失ったとお考えなのではありませんか。すでに長い来歴のなかで同誌がここ数号に匹敵するほどの内容を盛ったことがありますや。（話のついでながら）あなたは戦争にかんするアランの「プロポ」に丹念に目を通されたでしょうか。

とは言いながら私には、あなたが同誌にたいして感じる或る種の不快または不満の理由も分かります。それは『新フランス評論』がリヴィエールの個性も、また私の個性



も、さらには確固たる方向性をもった如何なるグループの個性をも明確には反映していないことに由来するのです。しかし、そのような同誌の過誤も戦時にあっては……。これはお会いして論ずべき格好の話題でありましょう。いずれまた。

アンドレ・ジッド

ジッドが『新フランス評論』のことを「いつも全面的に認めていたわけではないと匂わせた」のは4月1日号の「アンジェルへの手紙」の冒頭<sup>11)</sup>、またアランの「プロポ」とは5月1日号の「3月あるいは裁かれた戦争」<sup>12)</sup>のことを指す。最終段落に名の挙がるジャック・リヴィエールは1912年1月から『新フランス評論』の実質的な編集次長<sup>スケレテール</sup>であったが、1919年6月に同誌が復刊するとジャック・コポーの後を継ぎ新編集長として奮闘していた。だが彼の「個性」や、その後見の影響が同誌に明確に反映されるには、まだ幾ばくかの時間が必要だったのである。

ジッドの手紙を受けてスキュルマンズは直ちに返書を送っている(5月14日付。以後8月半ばまでは彼の書簡のみが残る)。諦めかけていただけに近々ジッドに会える喜びを伝えた後は、『新フランス評論』最新号掲載作品についての感想が文面を占める。ジッドが挙げていたアランの「プロポ」、またヴァレリーの「エウパリノス」、ブルーストの断章、チボーデの「文学にかんする考察」をことのほか賞賛。これらに比すると若干劣るが、マックス・ジャコブ、ポーラン、ジュアンドーの寄稿も評価。いっぽうデュアメル<sup>デュアメル</sup>の短編、ブラウニングの翻訳をかなり厳しく批判する。総評としては、ジッドが同誌から幾分距離を置くことで生じた「批評的指導力の欠如」を嘆いている。

ジッドは先便で告げていたように、6月10日にブリュッセルに赴き、20日まで同地に滞在(逗留先は友人の画家ファンデン・エカウト宅)、続いてルクセンブルグ・コルパハの富豪マイリッシュ夫妻宅を訪問(そこでクルティウスを知る)、25日に再びブリュッセルに戻った後、7月2日には妻マドレーヌが常住するキュヴェルヴィル<sup>キュヴェルヴィル</sup>に帰着。この間、先述のように、6月半ばにはスキュルマンズと初めて対面し、約束どおり『一粒の麦』下巻の冒頭部を読んで聞かせている。またその折りに同書上巻を貸与したものと推測される。

6月16日付のスキュルマンズ書簡はジッドとの対面で覚えた感激を熱をこめて綴る。後者がブリュッセルの文化サークルで披露した「『アルマンズ』序文」の朗読から受けた感銘もさることながら、とりわけ個人的に読み聞かされた『一

粒の麦』下巻の冒頭部を『アンリ・ブリュール』の告白にも比すべき「真実と良心の叫び」であると手放しの賞賛。続けて、自分のごとき卑小な存在が大作家の面識を得たことは「最も大きな喜び、最も大きな誉れのひとつ」と述べ、コルバハから戻られたらブリュッセルでもう一度お会いできればと結んでいる（この再度の面会は実現した模様）。

続いて7月3日の手紙では、前便で表明したジッドとの面会の喜びを繰り返して伝えたいので、かつては走り読みであったために十分に理解したとは言いがたい『アミンタス』をもっと深く読み込みたい、については同書を手に入れるパリの書店があればご教示を乞うと依頼。またその名声にもかかわらず、ジッドには「文壇人」じみたところが一切ないのを稀有のことと賞賛する。

さらに8月16日には、周りから何度もジッドにブリュッセル講演を依頼してくれと頼まれているのだが、これは無理なお願いだろうかとの質問。また7月後半をイギリスで過ごし、今月初めにベルギーに戻ったが、旅行の印象は芳しくなかった、それについてはまたお会いできた折にお話したい。続けて、刊出して間もないジュアンドーの『テオフィルの青春』を読んだが、第1部を除きいささか失望させられた、など。

この手紙に込めてジッドは久方ぶりに便りを返す――

#### 《書簡6》

コルバハ、[1921年]8月19日〔金曜〕

ルクセンブルク大公国、ルダングュ＝シュル＝アテール

拝啓

私の無沙汰であなたを苦しめてしまい申し訳ありません。今月初めから、7月3日の素晴らしいお手紙にたいする最良のお返事となるはずだったブリュッセル行きとペピニエール通り〔お宅の〕訪問を一日延ばしにしておりました。

お宅を訪ねることが私にどれほどの慰め・励ましをもたらすか包み隠さず申し上げたならば、あなたはおそらく私が大げさな物言いをしているのだと思われるでしょう。しかし数日後にはそういったことどもすべてを語り合ひましょう。やっと来週月曜にはブリュッセルに赴ける見込みであり（確実に赴けるという意味です）、早めに到着して多分当日のうちにあなたにお目にかかるでしょう。ということで、他に別用がなければ、来週〔22日〕月曜の午後4時頃（まだ汽車の時間を確かめていないのですが）、ご自宅で私をお待ちください。用事がある場合は、一言いただければ〔それにしたいが〕お宅に参上いたしますので、当夜のご都合よい時間をお知らせください。

奥様にくれぐれもよろしくお伝えください。敬具

アンドレ・ジッド

この間ジッドは、7月の半ばにはキュヴェルヴィルで『一粒の麦』下巻を脱稿、8月初めには『新フランス評論』に前述の『『アルマンズ』序文』を發表している<sup>13)</sup>。

また彼は8月18日頃、ブリュージュの印刷業者エドゥアール・ヴェルベケに宛てて「新しい仕事」（もちろん『一粒の麦』下巻の印刷のこと）を依頼したいと、また後掲のスキュルマンズ宛と同じ22日には、ブリュッセルで直接会いたいと書き送っている<sup>14)</sup>（ただしこの面会は実現せず、書面での依頼となった模様<sup>15)</sup>）。ちなみにヴェルベケの経営するサント＝カトリーヌ印刷所は、『新フランス評論』創刊時からその印刷を請け負い（大戦勃発により同誌が休刊する1914年8月まで）、また1911年からは新フランス評論出版の単行書（1914年6月刷了のマラルメ『骰子一擲』までの約60冊）の印刷を一手に引き受けていた。その巧みな組版・印刷を高く買っていたジッドは戦後も『田園交響楽』や『コリドン』私家版第2版、『一粒の麦』上下巻、『汝もまた……？』私家版（1922年）を委ねたのである。

予告していたブリュッセル行きは2日ほど延期となる。次はその旨を知らせた電報（発信地のアルロンはベルギー・リュクサンブール州の州都）——

《書簡7》（電信）

〔アルロン，1921年8月22日月曜，10時45分発信〕

やむなく訪問は〔24日〕水曜に延期。

アンドレ・ジッド

24日当日の面会では『一粒の麦』下巻のことが主たる話題となり、以後のジッド書簡が証するように、スキュルマンズはブリュージュから届く校正刷をジッドに転送する役目を委ねられる。

ジッドは2日後ふたたびコルパハに戻り、さらに9月初めにはマルタン・デュ・ガールの居住するイエール＝ブラージュに移動。同地からスキュルマンズに校正刷転送にかんする指示を書き送っている——

《書簡8》

〔イエール＝ブラージュ，1921年9月2日〔金曜〕〕

スキュルマンズ様

昨日の朝イエールに到着しました。私が当地を離れる前にヴェルベケの校正刷があなたの元に届いた場合は、次の住所にお送りいただけますか——

ヴァール県、イエール＝プラージュ  
 オテル・ド・ラ・プラージュ

9月13日以降の場合には、数日の間お手元に留めておいていただき、26日に私がパリに寄るさいに受け取れるよう、「グルネル通り3番地、新フランス評論」にお送りいただくほうが無難でしょう（つまり、ブリュッセルから13日には私宛にお送りいただけます。17日には当地を発つ予定ですが、郵送に4日見ておけば十分だと思います）。

重ねてお礼申し上げます。奥様によろしくお伝えのほど。敬具

アンドレ・ジッド

続いては翌週移動したアルデッシュ県サン＝クレールから――

### 《書簡9》

サン＝クレール、[19]21年9月9日〔金曜〕

スキュルマンズ様

最初に思っていたよりも早くパリに戻ります。したがって、これから私の新たな便りまでの間にヴェルベケの校正刷を受け取られた場合には、次の住所にお送りいただければ幸いです――

パリ、グルネル通り3番地  
 新フランス評論

重ねてお礼申し上げます。匆々

アンドレ・ジッド

この翌週、スキュルマンズはジッドに返書を送り、まだ校正刷は受け取っていないが、届きしだい転送すると報告。また、すでにジッドから勧められていたのだろう、その意見に同意したうえで、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』を読んだ感想を述べている<sup>16)</sup>。スキュルマンズによれば、「やや病的な激しさを備えた驚嘆すべき作品」だが、その結末は不出来。とはいえ女主人公キャサリン・アーンショーの性格描写は臨床医学の見地からは至極正当である、と医師らしい意見表明。またチェーホフを読み始めているが、『<sup>ザ・ビショップ</sup>僧正』から受けた印象は、ジッドが終戦翌年『新フランス評論』に発表していた「あるドイツ人との会話」<sup>17)</sup>のそれに近いものがある、など。

前掲書簡での通知とは異なり、ジッドがパリに戻るのには実際には同月の25日で、彼の返信が遅れるのはおそらくこの予定変更のため。なお、以後しばらくはスキュルマンズへの書簡と並行してヴェルベケとの遣り取りが始まるが、前者の引用だけでその間の経緯はほぼ遺漏なく追えるので、補説は最小限に抑えよう。まずは9月29日付のスキュルマンズ宛――

## 《書簡 10》

パリ, [19]21年9月29日〔月曜〕

スキュルマン様

お手紙拝受。ありがとうございます。ヴェルベケからは相変わらず何も受け取ってはおりませんか。彼には同じ便で手紙を送って発奮を促します。

2日後にはキュヴェルヴィルに戻りますが、まだ新フランス評論に校正刷を郵送なさっていない場合は、次の住所宛にお送りくださるようお願いします——

セヌヌ＝アンフェリウール県

クリクト＝レスヌヴァル経由キュヴェルヴィル

重ねてお礼申し上げます。敬具

アンドレ・ジッド

拙著『選文集』<sup>モルソー・ショワジ</sup>はおそらく2週間後には出来、<sup>しゅったい</sup>間をおかずお届けいたします。

追伸にある『選文集』は、かねてよりジッドが「大きな重要性」を認めて準備していた自作品のアンソロジーだが<sup>18)</sup>、後掲書簡も触れるように、実際の刊出は11月半ばまで遅れる（刷了は同月8日、印刷所は戦争終結後、新フランス評論関係の出版物を請け負っていたソンム県アブヴィルのF・パイヤール）。いっぽう待ちに待った校正刷は翌日、新フランス評論気付で届く。ジッドは直ちに受領確認の電報を打った——

## 《書簡 11》（電信）

〔パリ, 1921年9月30日金曜, 16時10分発信〕

校正刷の小包受領。深謝。

アンドレ・ジッド

スキュルマン様から返信がなかったのだろう、翌週末、ジッドは次の書状で再度礼を述べるとともに、以後の郵送先・送付時期について指示している（手紙の用箋は「新フランス評論」のレターヘッド入り）——

## 《書簡 12》

キュヴェルヴィル（クリクト＝レスヌヴァル）

セヌヌ＝アンフェリウール

[19]21年10月8日〔土曜〕

スキュルマン様

私からの受領通知の電報は受け取られましたね。素晴らしい梱包でした。送付にあたってのご配慮にいたく感じ入っております。

現在、校正に専念しています。ヴェルベケから新たに送られて来たものがあれば今度もまたグルネル通り3番地の新フランス評論宛ご送付ください。ただし今月15日以前にはなく。

1週間後か10日後、パリに戻らねばならない用があります。だから小包がそれよりずっと前に〔新フランス〕評論に届いても意味がないのです。

さようなら。再度お礼申し上げます。敬具

アンドレ・ジッド

後段の記述にあるようにジッドは10月半ばにパリに戻り、月末まで首都に滞在、その後イタリア各地を経由してローマへ向かうが、その間、手紙を2通送っている。

まずは出立当日パリから――

《書簡13》

[パリ, 19]21年10月30日〔日曜〕

スキュルマンズ様

今晚パリを發ちます。ヴェルベケに手紙を書いて仕事を急かせます。校正刷がまったく届かないのにうんざりしているからです。それを受領次第、「ローマ、局留め」にお送りくださるようお願い申し上げます。

昨日、拙著『選文集』<sup>パーヴェル・ジョワズ</sup>〔ママ〕の献呈リストにあなたのお名前を書き入れました。というのも数日後でないと出来ないため。時間の余裕がなく、出発の2時間前に大急ぎであなたへの手紙<sup>したな</sup>を認めています。敬具

アンドレ・ジッド

次いで10日ほどしてローマから新たな校正刷の送付にたいする礼状――

《書簡14》

ローマ, [19]21年11月10日〔木曜〕

スキュルマンズ様

ローマに着くと、送ってくださった校正刷の新たな包みが届いていました。厚くお礼申し上げます。今や拙著はすべて組まれています。ヴェルベケには頁組みされた新しい校正刷を求めます。彼がいくらか急いでくれるなら、拙著はまもなく出来の準備が整います。というのも手を入れるところは最早ごく僅かなので。

6日前からイタリアにおります。ピサやシエナ、キウージ、あるいは最初に投宿したオルヴィエートばかりか、このローマでさえも『賃金つかい』を書くための理想の滞在地が見いだせるか大いに訝っています。ということなので、しばらくして次の送付先にキュヴェルヴィルを指定したとしても、そんなに驚かないでください。

それまではローマの

グレゴリアーナ通り5番地、ペンシオーネ・ルッカリアイ

に一言お送りいただき、『新フランス評論』の最新号にご不満であるかどうかお知らせください。私はこの最新号を受け取ったばかりなので、そもそもまだ全部に目を通したわけではありません。しかしパリで私はリヴィエールが真剣に努力しているのを確かめましたので、彼がじきに成果をもたらすことを疑っておりません。唯一、イギリ

ス文学にかんする優秀な通信員がいさえすればと……。

さようなら。奥様によろしくお伝えのほど。敬具

アンドレ・ジッド

拙著『バージェ・ショワジ選文集』〔ママ〕の献呈リストにあなたのお名前を書き入れました。おそらく  
今月15日頃には出来ます。

文中に言及される『贖金つかい』の執筆が難航していたのは、同作と対をなす『贖金つかいの日記』（1926年）の当該期の記述が具体的に伝えるところ。また、その未熟さは否めないにせよ、ジッドが後見として『新フランス評論』の若き編集長リヴィエールの努力を高く評価し、折々に激励していたことは両者の往復書簡の随所に窺える<sup>19)</sup>。

1週間後（11月17日）、スキュルマンズは長い手紙を返すが、『選文集』受領の謝礼と最近の読書体験の報告がその主たる内容。まず『選文集』については、いくつかの未見の文章に接しえた喜びを述べたうえで、しかしこの種の出版は、網羅的でないだけに不注意な読書にはその不完全さが強調されてしまう危険もあると指摘。だが同時に、このアンソロジーからはジッド作品の古典的側面が見てとれると評価。この側面と、やはり同著に垣間見られる革新的側面との融合こそがジッドを稀有の作家たらしめているのだ、と。続けて『アミンタス』を入手、最近『アンドレ・ワルテルの詩』の出版予告が出たので（翌年にマリー・ローランサンによるジッドの肖像画を付して刊出）、これによってジッド作品のほぼ全てを手元に置くことができる。また『贖金つかい』執筆のための好適地を見出せないのなら、なぜブリュッセルにおいてならぬのか、と誘いの質問。『新フランス評論』最新号については、ジッドの論文（次段で言及する「仏独間の知的関係」）を絶賛、次いでヴァレリー・ラルボーの見事な短編『恋人たち、幸福な恋人たち』が明らかにジョイスの影響を受けていると指摘し、また同号のなかに劇評欄を担当するポール・レオトー（当時の筆名はモーリス・ボワサー）と、書評を掲載し始めたフェルナン・フルーレの名を認めて嬉しかったと続ける。さらにハヴロック・エリス（イギリス生まれの医師・性科学者・心理学者）を再読している旨。その学説はつねに正確だとは言えないが、すこぶる興味深い。そう評しつつも、「羞恥心」の発現についてはエリスとは異なる考えを披露、等々。

ジッドは11月24日イタリアからキュヴェルヴィルに帰着するが、その翌日

にはヴェルベケに宛てて、『一粒の麦』下巻の新たな校正刷は1部をスキュルマンズに、もう1部をキュヴェルヴィルに書留で送るよう依頼、また表紙の組版について具体的な指示を与えている<sup>20)</sup>。次は彼が翌月2日にスキュルマンズに書き送った手紙。ちなみにこの間、『新フランス評論』11月号には、クルティウスがドイツの月刊誌『デア・ノイエ・メルクルール』6月号に発表した論文「独仏間の知的問題」に込めて両国の文化的宥和を説いた「仏独間の知的関係」が掲載されている<sup>21)</sup>——

《書簡15》

キュヴェルヴィル（クリクト＝レスヌヴァル）  
セーヌ＝アンフェリウール  
〔19〕21年12月2日〔金曜〕

スキュルマンズ様

見いだしがたい快適さ、そして平穩をイタリアに求めるのは諦め、再びキュヴェルヴィルに戻ってきました。ここで1週間になりますが、直ぐに仕事に取り掛かりました。初校の最終部をヴェルベケに返送、彼はいま頁組みに専念しています。次の包みはさほどの量ではなく、もはや私の行く先々を追って転送の必要もないので、直接キュヴェルヴィルに送ってくれるように頼みました。あなたにも全体の校正刷を1部送るよう依頼したのですが、しかし今度は返送していただくためではありません——少なくとも、まことに有難いことですが、それを細心入念に再読いただき、依然として残っているのが確実で、また私が見逃しうるような誤植をご指摘いただくまでは。

こんなお願いをして申し訳ありません。いずれにせよ、少しお手すきの場合で結構ですので、ご無理をなさらぬように。この束をご返送いただくのを待って、ヴェルベケに送るまえに、あなたがしてくださる修正を手元の校正刷に転写いたします。

この本はさほど間をおかず出来るでしょう。申し上げたように、その1冊はあなた用に取っておきます。

さようなら。奥様にくれぐれもよろしくお伝えのほど。敬具

アンドレ・ジッド

新フランス評論から『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』誌の或る号をあなた宛に送らせました。そこでは私の与える影響を人々に警告するマシスの論文を興味深くお読みになれるでしょう。

〔原註：封筒の裏に〕たった今あなたの素晴らしいお手紙〔おそらく11月17日付書簡〕がイタリアから私のところに戻ってきました。

追伸第1段落について若干の補説をすると、『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』はアンリ・マシスがジャック・バンヴィルと共に、ジャック・マリタンらほかのモース主義者を糾合して1920年に創刊した月2回発行の雑誌。マシス自身は



もともとジッドにさほど敵対的だったわけではないが、『法王庁の抜け穴』（1914年）以後は徐々に批判を強め、特に前出『選文集』の書評として11月15日号に発表した「アンドレ・ジッドの影響」では、作家独自の概念「誠実」<sup>カンセリテ</sup>を逆手にとって攻撃を開始する——「ジッド氏は、真実はひとつだが虚偽は無数にあるのだから、真実よりも虚偽のほうが豊かだと思込んでいる。悪にたいする彼の偏愛はここに由来するのだ。[...]ジッドの美学的誤謬はなによりもまず倫理的な誤謬なのだ。私が思い浮かべるのは、『悪は構成せず』という、教えと真理に満ちたポール・クローデルの言葉である。この言葉こそがジッドの敗北、彼の芸術の敗北をもの見事に説き明かしている」<sup>22)</sup>。ここに発してマシスはその後も執拗な反ジッド・キャンペーンを展開することになるのである<sup>23)</sup>。

同月半ばには次のスキュルマンス宛——

《書簡 16》

[キュヴェルヴィル, 19]21年12月13日〔火曜〕

スキュルマンス様

この不測の事態については、ただただ我が身を嘆くばかりです。ヴェルベケが突如やる気を出しましたのに……。あなたからローマに送られた校正刷ははまだ手にしていないのです。それで私としては彼の地の友人に手紙を書いて、郵便局員たちを急かすよう依頼します。

私は明日ふたたびパリに行きますが、おそらくそこに一月近くは逗留することになるでしょう。投宿先はまだはっきり決まっていないので、唯一お知らせできる住所は次のとおりです——グルネル通り3番地、新フランス評論気付。

どんな用件であれ、たまたま私に手紙をくださることがあるならと、この住所をお知らせする次第。——今度はいつあなたにお目にかかれるでしょうか。匆々

アンドレ・ジッド

長々とした説明を要する諸々の理由で、おそらく一月後にならないと「校了」は打てないでしょう。

さらにその半月後、いよいよ年の瀬も押し詰まったの書簡（ジッドは月記述を「1月」と記すが〔刊本も同様〕、これは明らかに「12月」の誤り）——

《書簡 17》

[パリ, 19]21年〔12〕月29日〔木曜〕

スキュルマンス様

ご安心あれ。校正刷は拝受、とはいえ届いたのはローマから戻った昨日になってのことでしたが（友人の厚意にすぎたってイタリアの郵便局員たちを急かさねばなりませんでした）。そして今晚あなたの愛情あふれるお手紙が届きました。新年のご挨拶を口

頭で申し上げられるだろうと思います。拙著の印刷のためにブリュージュに赴くつもりです——そのさいブリュッセルに立ち寄ることになりましょう——おそらくは2週間後のことです。匆々

アンドレ・ジッド

だが実際にはジッド自身のブリュッセル行きは実現しなかった。そのことを告げた年明けの書簡——

《書簡 18》

[パリ, 19]22年1月9日, 月曜

スキュルマンズ様

急な制約が入ったため旅行は取り止めざるをえません。明日ブリュッセルに向けて発つ〔エリザベート・〕ヴァン・リセルベルグ嬢が親切にも私に代わってヴェルベケの印刷に立ち会ってくれます。あなたにお約束した1冊を彼女がお渡しします。どうか蔵書の最も内密の場所にお仕舞いおきください。

私宛の手紙を受け取れるよう、あなたのご住所を伝えさせていただきました。届いた手紙はヴァン・リセルベルグ嬢にお渡しください。それを彼女が私に届けてくれますので。

あなたとの再会をいつまでも果たせぬままではないよう願っております。敬具

アンドレ・ジッド

ここで名の挙がる画家テオとマリアの一人娘エリザベートが翌年4月ジッドとのあいだに非嫡出子カトリーヌをもうけることは周知のとおり。ちなみに『一粒の麦』下巻は2月に無事出来するが、奥付の刷了記述は前年の暮れ(12月24日)となっていた。

身内の不幸を告げたスキュルマンズの手紙は保存されていないが、ジッドはおそらく日を置くことなく悔やみ状を送り、同時にブリュージュでの『一粒の麦』の代理受領をはじめ(その任に当たった「友人」とは、1920年6月以来『新フランス評論』の編集に参与していたジャン・ポーランのこと<sup>24)</sup>)、近況を手短に報告している——

《書簡 19》

[パリ, 19]22年1月30日〔月曜〕

スキュルマンズ博士

喪のお悲しみを我が身のものとしていただきますことをお信じください。お悔やみを口頭でお伝えしたかったのですが、どうしてもパリに留まらざるをえず、ブリュージュ行きは友人に代理を頼みました。あなたに再会する機会と喜びは春まで延期ということになるでしょう。

私とその使命を信頼して委ねる友人にはブリュッセルに立ち寄る時間がありません

ので、お約束した1冊は私自身がお持ちします。申し訳ありませんが、今しばらくお待ちいただきたく。

いえ、あなたが話しておいでジョイスの著書は読んでおりません。是非読んでみたいと思います。

私はコポーにドストエフスキーにかんする6つの講義（談話）をする約束をしました——その準備のため、このあたりで失礼いたします。

奥様にくれぐれもよろしくお伝えください。敬具

アンドレ・ジッド

スキュルマンズが話題にした（そしてジッドがまだ読んでいない）というジョイス作品の特定は難しいが、1916年刊の『若き芸術家の肖像』、あるいは蓋然性は低いものの、完全版が出来直前の『ユリシーズ』のことか<sup>25)</sup>。また書簡後段が言及するドストエフスキーにかんする連続講演は、2月17日から翌月25日にかけてコポーの指揮するヴィユー・コロンビエ座でおこなわれる（講演テキストの初出は『ラ・ルヴュ・エブドマデール』誌、翌年1月13日号から2月17日号まで6回連載）。スキュルマンズはこの話題を受けて、いずれベルギーでも同じ講演を依頼したようだが、ジッドは次の書簡で、これはむしろ「談話」にすぎぬ旨を述べて固辞している（当の連続講演がフランスにおけるドストエフスキー受容に決定的な役割を果たすことになるにもかかわらず、同様の発言は以後たびたび繰り返される）——

### 《書簡20》

[パリ、1922年2月7日] 火曜

親愛なる友

丁寧なご提案をいただきましたが、2日ばかり遅すぎました。大変ご多忙だろうと思ひ、あえてご厚意におすがりすることはせずにおりました。こちらから誰かを遣るのは容易でなかっただけに、あなたのご助力は大いに有難いところでしたし、私が秘密の吐露をさほど嫌だと言いつれぬのもまた確かなところですが。

ドストエフスキーにかんするこの連続講演がどのようなものになるかは分かりません。実を言うと、これはむしろ「談話」であって、私の話はとても拙いものになるのではないかと危惧しております。少なくとも現在のところ、この経験をブリュッセルまで引きずろうなどという気はまったく起きません——とはいえ、あなたのお申し出には感じ入っております。

戦前に撮った写真を一枚同封いたします。手元に残っている2番目に新しい写真です。出来の悪いこの写真が『選文集』の巻頭を飾るとは遺憾なことです。またお会いしましょう。この春にはと願っております。匆々

アンドレ・ジッド

なお『一粒の麦』下巻は13部印刷されたが、上巻よりも1部多くなったのは、まず間違いなく贈呈者として新たにスキュルマンズが加えられたためであろう。

続いては、彼からの問い合わせ（肖像写真の同封にたいし札を述べたはずの書状自体は保存されておらず）に答えて、『一粒の麦』の寄贈方法について述べた2週間後の短信――

《書簡 21》

[パリ, 19]22年2月21日〔火曜〕

親愛なる友

ご安心ください。[マリア・] ヴァン・リセルベルグ夫人が、夫[テオ]の展覧会のため来週にはブリュッセルに赴き、あなたに手ずから拙著をお渡しします。私自身から直にお渡しできないの残念ですが……。しかし、いずれにせよ近々には。匆々

アンドレ・ジッド

しかし次の書簡の記述を信じるならば、『一粒の麦』がスキュルマンズに届けられたのは2月中にはなく、翌月半ばになってのことであった――

《書簡 22》

[パリ, 19]22年4月1日〔土曜〕

スキュルマンズ様

ヴァン・リセルベルグ夫人が2週間前にあなたにお届けした拙著がたしかにあなたの手に渡っただろうかと、いささか不安に思っております……。ほんの一言いただければ安心いたしますので、どうかよろしく。予定していたブリュッセル行きは時期未定で延期となりました。仕事が増えたためパリに留まっております。敬具

アンドレ・ジッド

スキュルマンズからの受領報告は保存されていないが、これを受けたジッドの返信――

《書簡 23》

[パリ, 1922年4月6日] 木曜

スキュルマンズ様

とりいそぎ一言（きわめて多忙にしておりますので）。ええ、お手紙は確かに拝受しました――同時にその前のお手紙も頂戴しました。ありがとうございます。

これから当分のあいだブリュッセルに赴けるとは思えません。

ジョイスについては……また議論いたしましょう。匆々

アンドレ・ジッド

現存が確認された書簡によるかぎりは、ジッド側からの応接は10月末まで半

年ほど間が空く。それまでの彼の活動を掻い摘まんで記せば、5月には『ル・ディヴァン』誌に「ヴァレリーの審美的概念」を発表<sup>26)</sup>、また活字化に向けてドストエフスキーにかんする連続講演の原稿に手を入れ、さらにウィリアム・ブレイク『天国と地獄の結婚』の翻訳にも取りかかっている。6月半ばにはヴィユー・コロンビエ座で旧作『サウル』が上演されるも（演出はコポー）、評価は賛否両論に割れた。同月下旬、ジッドはパリから南仏に移動、7月10日からはイェール・プラージュに逗留し、『ハムレット』の翻訳に着手。なお当地でエリザベート・ヴァン・リセルベルグと関係を結び、翌年4月に娘カトーンが誕生するのは前述のとおり。8月に入ると『新フランス評論』に『天国と地獄の結婚』を掲載（刊本は翌年1月にクロード・アヴリーヌ社より出来）、戦死した親友の妻宛書簡に序文を付した『海軍大尉デュブエーの書簡』が新フランス評論出版から刊出する。『ジュネーヴ評論』の依頼を受けて10月初旬には「ヨーロッパの将来」を脱稿（掲載は翌年1月<sup>27)</sup>）、間をおかず『贗金つかい』の執筆を再開、とほぼ切れ目なく著述活動を継続していた。次のスキュルマンス宛は無沙汰を詫びつつ、そういったところにも触れる――

#### 《書簡 24》

キュヴェルヴィル（クリクト＝レスヌヴァル）

セヌ＝アンフェリウール

〔19〕22年10月28日〔土曜〕

親愛なる博士にして友

そうです、返答を差し上げるのに私がひどく遅れてしまったことは承知しています。長く間を置き、あなたをがっかりさせてしまいました。仮にお詫びを申し上げ始めるとすれば、言い訳に終止することでしょう。しかしこの夏、あなたに返事を書きそこねてしまったのは、前の前のお手紙にあった、ジョイスにかんする一文にかかわる事柄のせいだったのです……だがその事情を述べ始めれば、あまりに長い話になってしまったでしょう。あなたのお手紙がもとで、再び『ユリシーズ』を手に取りました。この本にたいするご意見がどうにも気になったのです。我々のあいだで意見が異なるというのは多くはない、いや滅多にありません……。それで『ユリシーズ』に手を伸ばしたのです。私は〔なんとか理解しよう〕この本に絶望的なまでにしがみつきました。だが、とんでもない。同書にはただはったりしか認められません。その前には『ある若者の人生』『若き芸術家の肖像』のこゝろを手にとっていたのですが、初めの20頁には魅<sup>のほ</sup>せられたものの、本は私の手から滑り落ちました。フランス語訳のことが話題に上っていますが……。私としては出版元に十分な資金力があることを願い、また訳者には同情を禁じえぬところです。

この夏は二、三度海水浴をしたり、冬に予定のキュヴェルヴィル籠もりに備え、陽

光を身に取り込んだりしながら、ほとんどずっと南仏で過ごしました。現在は減多に離れることのないこの仕事部屋からあなたへの手紙を認めて<sup>したた</sup>います。ここで私は、まるでヤコブのように、すでにお話ししておりました『贖金つかい』という、今や大長編にならんとする天使と格闘しているのです。——と言いつつも、この作品には実のところまだほんの僅かな期間しか取りかかっておりません。〔ジョルジュ・〕ピトエフに懇請され、身のほど知らずにも『ハムレット』の翻訳に着手していましたが、第1幕までしか進められずにいます。冬はずっとこれに掛かりきりということになるでしょう。それに続いては、『ジュネーヴ評論』誌に約束したヨーロッパの現況にかんする論文に2週間苦しみ抜きました！ 私としては細心の配慮を払い、手練手管を駆使して問題の解明に努めましたが、最も細い枝を引き寄せようとするや、生い茂る森全体が頭上に落ちてくるような感じでした。——結局は、どうにかこうにか切り抜けはしましたが。——現在は『ラ・ルヴュ・エブドマデール』のためにドストエフキーにかんする談話の校正刷を見直さなければなりません。そこでは私が大変重要だと見なす事柄を語っていますが、語り方が拙く混乱しているため、何も話さなかったほうが良かったのではないかと思ってしまう。——ほかに何があるかと言うと……。プーシキンの翻訳を見直しています……。それやこれやが元で、あなたに書こうとしていた内容のごく一部さえもお話せぬまま筆を擱かねばなりません。せめては、また如何に不完全にであれ、本状によって私の変わらぬ敬意をご納得いただければと。私には「基礎代謝」にかんする疑問が山のようにあります。次に再会した折は、私が最大の利を得られるように、私自身は文学を話題にするのを控え、あなたがもっと医学の話をしてくださる必要があります。

もはや私は怒りを覚えず吐き気を催さずして〔非業の死を遂げたピエール＝ドミニック・〕デュブエーの本を開くことはできません。かくのごとき天使たちが私を地獄へと急がせるのでしよう。

ヴァレリーをブリュッセルにですと？ ええ、もちろんですとも——あなたが彼に十分な報酬を支払えるのであれば。彼は金銭的に窮しており、ひどく疲れています。十分な物質的利益がないのであれば、ご当地への彼の招聘をお考えになつてはなりません。——私については……いや、どんなお誘いもお断りします。どんなに僅かにであっても熱意が減退しては拙著の執筆が挫折しかねません。ここで筆を擱かせていただくのも執筆に戻るためなのです。

奥様にくれぐれもよろしくお伝えのほど。幼いお嬢様に微笑みかけます。匆々

アンドレ・ジッド

まずはジョイスについてだが、それに先立ち、遅ればせながら当時のジッドの英語力に触れておこう。『法王庁の抜け穴』の執筆停滞を打破し、この新たな小説に必須のピカレスクな広がり、「レシ」作品群とは異なる自由奔放な文体を探るべく、彼が範を求めたのがデフォーやフィールディング、スウィフトらで、

1910年の本格的な英語学習の開始に続き、『ロビンソン・クルーソー』を、次いで『トム・ジョーンズ』『ガリヴァー旅行記』を「生肉を<sup>かじ</sup>嚙るように」貪り読んでいる。後年の回想によれば、その後も「数年間はほとんど英語しか読まなかった」ほどであった<sup>28)</sup>。かくのごとく、会話はともかく読解力は十分に身につけていたと言ってよい。さて、ジッドが最初に読んだジョイス作品は、確かな記録が残るかぎりでは、『若き芸術家の肖像』、あるいは前述のように出来して間もない『ユリシーズ』で、この年の3月のこと。彼の熱烈な信奉者で、後にその作品をいくつか英語訳したドロシー・ビュッシーに宛てた書簡には次のように記されている——「ジョイスの『若き芸術家の肖像』はすこぶる面白い、『ユリシーズ』にうんざりさせられたのと同程度に。私はこの作品に没頭しています」（3月8日）。だが暫くすると評価は一転、「『若き芸術家の肖像』は放擲。退屈になってきたので」（3月21日）<sup>29)</sup>……。上掲書簡はこういった芳しからぬ印象が変わらぬなかで綴られたのである。また『ユリシーズ』のフランス語訳については、類い稀な語学力を誇るヴァレリー・ラルボーの関与が決定的であった。彼は1920年の暮、パリ6区オデオン通りで英米書の書店「シェイクスピア・アンド・カンパニー」を開いていたアメリカ人女性シルヴィア・ビーチを介しジョイスと知り合うが、その1年後におこなった作家紹介（特に『ユリシーズ』）の講演会を機に、フランス語全訳の計画が話題に上りはじめる。当初は誰しもが訳者にはラルボーが最適任と考えたが、様々な理由から実際の作業は彼の指名した年若きジャック・ブノワ＝メシャンや親友レオン＝ポール・ファルグラに引き継がれ、ラルボー自身は監修者の役に就く。ジッドが同書の出版資金を案じ、訳者の労苦に同情するのは、当時難航を続ける翻訳作業をラルボー本人や、ビーチの親友で、やはりオデオン通りで書店「本の友の家」を構えていたアドリエンス・モニエらを通じてかなり詳しく承知していたからである（その後、1924年の『コムルス』誌創刊号での部分訳掲載を経て、全訳がモニエの書店から刊出するのは漸く1929年になってのこと）<sup>30)</sup>。

続いてはジッド自身が準備中だった翻訳について——『ハムレット』第1幕は、イギリス人女性アラナ・ハーパーが編集する文芸誌『エシヤンジュ』の創刊号（同年12月）に掲載され、翌年には改訂訳が単行出版される<sup>31)</sup>。ジッドが訳稿を見直しているプーシキンの作品とは、ロシア出身の友人ジャック・シフリン、ボリス・ド・シュレーザーの2人と共訳した『スバードの女王』のこ

と（シフリンが興したプレイアッド出版から翌年3月に出来）。また文面最後に言及された、ブリュッセルでヴァレリーに講演させようというスキュルマンズの計画は翌週の書簡でも引き続き話題となる——

《書簡 25》

キュヴェルヴィル, [1922年] 11月3日〔金曜〕

親愛なる博士にして友

最も簡単なのは断然、私があなのお手紙をヴァレリーに渡すことです。直ぐにそういたします。あなたの魅力的なお手紙のトーン自体が私たちの関係の親密さを彼に分からせ、私が彼に書くどんなものよりも好く紹介の役をしてくれるでしょう。しかし私のほうでも一言添えて彼をその気にさせましょう。匆々

アンドレ・ジッド

とりあえずは、今しがた彼から受け取ったハガキを同封いたします。

追伸が触れるヴァレリーのジッド宛ハガキは、その後もスキュルマンズが保存しており、前出の旧蔵書競売目録に記録されている。それによれば日付は「この水曜」とあるので11月1日に書かれたもの。短いロンドン滞在の後（彼の地ではレディー・シビル・コルファックス宅で『蛇の素描』を朗読）、明日にはパリに向けて出発する、と<sup>32)</sup>。

かくして同月半ば、遅くとも下旬までにはヴァレリーのベルギー講演の話はジッドの仲介でまとまっていた<sup>33)</sup>。次は刊本には未収録の書簡（個人蔵）——

《書簡 25 bis》

キュヴェルヴィル, [1922年] 11月30日〔木曜〕

親愛なる博士にして友

ヴァレリーにたいする私の仲介が実を結んでまことに幸いです。パリで会ったさい彼はベルギーに赴こうという堅い意思を語っていました。

ジャン・シュランベルジェもベルギーで2日間過す準備をしていますが、私は彼の著作にたいするあなたのご意見をもはやよく覚えていないので（そのことで我々は会話したとは思のですが）、あなたを煩わせるのを怖れて、彼には取えてご住所を伝えませんでした。

ルネ・ラルーの『フランス現代文学史』については如何お考えでしょうか。まさにヴァレリーに、そしてプルーストや私にたいし与える位置づけのゆえに、同書は多くの文学者をひどく苛立たせているのですが、『新フランス評論』の10月号に載ったジュアンドーの『殺人者クロドミール』はお読みでしょうか。

さようなら。匆々

アンドレ・ジッド



ミシェル・ジャルティによる浩瀚なヴァレリー評伝には、詩人が12月6日スキュルマンスに宛てた手紙が引かれている——「しかし人前で話すわけですから、隠し立てすることなく申し上げますが、私は断じて雄弁家な者ではありません。声は弱々しく、弁説にはまったく実質が伴いません。できるのはただ雑談 (*causer*) 程度のことなのです、それも決して広すぎぬ会場での」<sup>34)</sup>……。この過度なまでの謙遜はドストエフスキー連続講演の際のジッドの「談話」<sup>ゴーズリー</sup>発言を思い起こさせよう。講演時期は翌年2月と決まったが、ジャルティによれば折悪しくスキュルマンスが病臥したため、実際にはその2人の友人、当地で文化サークルを指揮するフランク・フラウシュと、後年ベルギー幻想文学の旗手となる作家フランツ・ヘレンスが企画・実行を担うこととなった。題目としてヴァレリーが選んだのは「ボードレーとその後世」など<sup>35)</sup>。いっぽう書簡中盤に記されるシュランベルジェへの言及は主として『ルヴェルネの息子たち』ブリュッセル公演のことを指す。この戯曲は12月の半ばから下旬にかけてベルギー人演出家ジュール・ドラークルによって当地のマレー座で上演されるが、スキュルマンスは同月18日付書簡でジッドに、公演は「大成功。観客の大半が口々にマレー座最高の舞台と語る」と報告している<sup>36)</sup>。なお書簡終盤に名の挙がるラルーとジッドとのあいだには、11月から翌年1月にかけて数通の書簡が交わされている。おそらくは刊出して間もない前者の文学史(クレス社刊)の記述をめぐる遣り取りと思われるが、残念ながら筆者はそのいずれも未見。

話を12月に戻そう。同月初旬から下旬にかけてジッドは、すでに本稿冒頭部でも名を引いたラウル・シモンソンから計3通の手紙を受け取る<sup>37)</sup>。この青年愛書家(当時26歳)は、友人のロベール・ドレと共同でジッドの著作書誌を作成しようとしていたのである。まずは1日付の手紙で、「近々ある文芸誌にあなたの著作目録を發表するつもり」だが(実際には後述のように単行書のかたちとなる)、については「誤謬を避けるため、いくつか正確な情報をいただきたい」と依頼。その第1は、『イザベル』の2つの版について、最初の版が破棄された理由や如何、またそのうち残存するものはプレス・サービスに使用されたのや否や<sup>38)</sup>。第2に、「あなたの許可なしに『コリドン』を記載するのは憚れるが」(じじつ結果的にシモンソンは同書の1911年版・1920年版のいずれも採録していないが<sup>39)</sup>、これはジッド当人の「要望」に従ったため)、同書が限定版なのは、ややもすると誤解を招きかねぬ一般読者よりは、あなたが選んだ特

定者を想定したためなのや否や。第3として、差し支えなければ準備中の作品名とその出版予定についてご教示を乞う、と。5日付のジッドの返信は保存されていないが<sup>40)</sup>、これを受けたシモンソンの第2信(同月8日付)は、「あなたの要望に従ったうえで」、記述を更新次第、原稿をお送りする、またリヴィエールの『エチュード』(新フランス評論出版、1911年刊)のような簡略なものではなく、「もっと堅牢に構築され、どの細部もが完璧な」書誌を目指したいとの旨を伝える。いっぽうジッド自身はシモンソンに直接返答することはせず、翌週スキュルマンスに次のような人物照会の短信を送っている――

《書簡26》

キュヴェルヴィル＝アン＝コー、[1922年]12月14日〔木曜〕

親愛なる博士

ブリュッセル(フォンドロワ大通り48番地)のR・シモンソンなる人物が、私の全著作について作成予定の「書誌的な試み」にかんし手紙を寄こしてきました。この人のことをご存じですか。どんな人物なのでしょう。

仕事で多忙のゆえ、ほんの走り書きながら。

アンドレ・ジッド

スキュルマンスは上述の18日付返書でジッドの質問に答えるが、その口調はどこかしら冷ややかであった――「シモンソン氏は知っています、という言うよりは知っていました。親しい間柄とは到底言いがたいので、私としては彼についてあまりお話ししたくないところです。いずれにせよ、書店勤務の社交的な青年で、教養にも欠けてはいません」(シモンソンが後年、スキュルマンス宛ジッド書簡の版元となることを思えば、まさに縁は異なるものと言うべきか)。その数日後、シモンソンからの短い第3信(22日付)が、「別便で書誌の原稿を送るので、さらに補うところがあればご教示願いたい」と告げている。こうした遣り取りを経て、当該書誌は翌年9月、シャンピオン書店主の名を冠した叢書『エドゥアールの友』の一冊として出来するのである(さらに1924年10月にはその増補改訂版が、今度はシモンソンの単著書のかたちでオランダ・マーストリヒトのプーステン＝ストルス社から刊出)<sup>41)</sup>。

遺失分が皆無とは言い切れないが、スキュルマンスへの便りは前掲書簡の後1年ほど途絶えてしまう。じじつ後者の1923年12月1日付は次のように始まっている――「親愛なる友、まだそうお呼びしてもよろしいでしょうか。あなたが手紙に返事を出さないのは伝説的でさえあります。しかしこれほど多く

の手紙にお返事がいただけないのでは、はたして私はあなたを存じ上げていたのだろうか、そう疑い訝いぶかってしまいます」。これに続く文面を要すれば、まず言葉を尽くしてジッドの健康を気遣いつつ、ブリュッセル来訪の予定はないかと質問。文学的な話題としては、ジッドが推奨していたイギリスの小説家マーク・ラザフォードの自伝を賞賛。また、その本名がマーク・ホワイト（正しくはウィリアム・ヘイル・ホワイト）であることをご存じか、と。続けて『コリドン』について——「新フランス評論が私に言うには、最初の回答とは逆に『コリドン』刊行の準備は整っていない。これは正しいのでしょうか。あるいは反対に秘密裡での出版ということなののでしょうか。その場合にはぜひ私を予約者のなかに加えてください」……。家族の近況として、近々新たな子が誕生する。男児であれば、1914年に戦死した義兄の名にちなんでアンドレと名付ける旨を報告。最後に、ヴァレリーと知り合えた喜びを語って擲筆。

この書簡にたいしジッドは久方ぶりに筆を執る。その理由は明らかにスキュルマンズが『コリドン』普及版（1924年5月刊出）のことを話題にしたためであった——

### 《書簡 27》

キュヴェルヴィル, [19]23年12月4日〔火曜〕

親愛なる博士にして友

私の机の上には出版業者のフィシャー・アンウィンが私に送ってきた6冊の小型本（刊出したばかり）があります。マーク・ラザフォードの作品、と言うか少なくとも彼の「小説」です——ほかに日記が何冊か出ていますので。私の思うに、それらに続く『自伝』と『救出』が断然面白い。あなたがラザフォードの新たな賛美者にして友となるならば大変嬉しいのですが。

あなたは恐ろしい方だ、今やそう言わせていただきたい。私はあなたを信頼して出版の話をもひとつしましたが、誰にも内密にとも申し上げておきました。しかるにあなたは、初刷を1冊入手しようとして、ガリマール書店、次いでベルギーのいくつかの書店に、出版のことをこんなに急いで告げる必要などまったく無かったのです。

もちろん私は、あなたの方としては単なる不手際・軽率にすぎなかったとはよく承知しています。今日のお手紙にある次の文からもそのことは明らかです——「当初の回答とは逆に『コリドン』刊行の準備は整っておりません、新フランス評論はそう私に言っています」……。それにしても、忌々しい！ リヴィエールでさえもこの出版のことは知らないのに、連中に何を知っていて欲しいとお望みなのでしょうか。

「秘密を漏らした」(vendu la mèche) のはあなたなのです……。

あなたに話してしまったことに臍を噛み、過大で友好的すぎた信頼を悔むことでも

きたし、またそのために当初は互いの便りが幾分か途絶えたのも容易にお分かりいただけるでしょう。〔しかし〕私があなたを恨んでいるとは思わないでいただきたい。私は自分自身の非を難じているのですから。そしてあなたへの友愛の念は変わりなく強い、そうお信じてください。この気持ちがあればこそ、私はあなたが知せてくれたご家族の慶事を心から喜ぶことができるのですから。いや、この冬はベルギーには参りません、またその考えもありません。計画が変更になれば前もってお知らせしましょう。いずれにせよ、あなたにお目にかかれるのは喜ばしいことです。

奥様よろしくお伝えください。匆々

アンドレ・ジッド

まずは穏やかに始まる第1段落について補説しておけば、ジッドがラザフォードの存在を知ったのは、同じくイギリス人作家のアーノルド・ベネットを介してであった。彼の勧めに従い、1915年9月下旬、『マーク・ラザフォードの自叙伝』を「実に面白く読み始め」、翌月8日に読了、その感想を日記に次のように書き留めている——「この作品の素晴らしい誠実さ。これ以上明確にプロテスタント的な文芸作品はない。どうしてもっと一般に知られていないのだろう。この作品を教えてくれたベネットになんと感謝したものか！ヘイル・ホワイト（それが作者の本名）の文体の洗練された質の高さは、私自身が我が身にもと願っているものだ」<sup>42)</sup>。続いて年が明けた1916年の1月には、『自叙伝』の続編とも見なしうる『救出』、3月には『キャサリン・ファーズ』を深い感銘を覚えながら読み進めている。こうしてラザフォード作品はジッドのうちに大きな反響をとどめ、1918年夏からのマルク・アレグレとのイギリス旅行（あるいはむしろ「逃避行」と呼ぶべきか）に先立って、「解放の地イギリス」を強く印象づけていたのである<sup>43)</sup>。

しかし上掲書簡の本題はあくまでも『コリドン』であった。シモンソン書誌に同書が記載されぬよう望んだことから窺えるように、ジッドとしては公然たる同性愛擁護はまだ時期尚早と考えていた。それがゆえのスキュルマンス批判なのである。だが文通者は直ちに反論する。ジッドの批判を不当として、次のように釈明したのである（12月5日付書簡）——私はベルギーのどの書店にも『コリドン』の話をしたことはありません。新フランス評論から予約確認を受けるまで一切話したことはないのです。誓って申し上げますが、あなたが8月に出版予定だと仰った作品のことを、版元となるはずの新フランス評論は承知していなかったのです。私としては購入の予約をすることで何か失礼を働い

ているなどとは思ってもみませんでした。逆に、あなたには細々<sup>こまごま</sup>とした金銭的な話をしないよう気を遣っていたのです。仮に私が間違っていたとしても、よもや罪を犯したことなどにはなりません。またガリマール書店にはこのかたずっと訪れていませんし、(もう覚えていませんが)仮にこの件で手紙を書いていたとしても、あくまでそれは先方からの返答があつてからのことなのです。お手紙の辛辣で残酷な調子があまりにも悲しく、これ以上は申し上げられません。この度のことを嘆きつつも、私の変わらぬ友情をお信じいただきたくお願いする次第、云々……。以上がスキュルマンズの反論。事柄の細部にやや不分明なところは残るが、ともかくもこれを諒としたジッドは数日後、次のように書き送ったのである――

《書簡 28》

[パリ, 19]23年12月10日〔月曜〕

あなたにご休心いただきたく、今度は私のほうから一言<sup>いちごん</sup>差し上げます。私が苛立ちを表明したその誠実さ自体にあなたも安心なさるはずです。苛立ちを心中にとどめおくのは苦痛でしたし、それを表明した率直さもまた、あなたへの友情をつうじて、あなたに負うものだったからです。あなたから納得ゆくご返事を誘い出すことができずに存じます。友人として何の底意もなく御手を握ります。

アンドレ・ジッド

以後半年ほどは両者の書簡交換は確認されていないが、翌年半ばに悲劇がスキュルマンズ家を襲う。死因は不詳だが、長男アンドレが幼くして亡くなったのである。痛ましい知らせを受けてジッドが送った悔やみ状――

《書簡 29》

[パリ, 1924年]6月7日〔土曜〕

可哀想な我が友

なんと悲痛なお知らせでしょう！ あなたの幼子アンドレの眠る揺り籠に注がれる微笑<sup>みえ</sup>みになんとという涙が滲むであろうことか。あなたに想いを馳せませう。我が胸は塞がり、言葉もなく、悲しみに満ちて御手を握ります。

この喪を機にさらに深まり強まる忠実な私の友愛の念をどうかお信じください。さようなら。おそらくは近々に。匆々

アンドレ・ジッド

次はその翌月の書簡。冒頭では『汝もまた……？』の寄贈が話題となる――

《書簡 30》

キュヴェルヴィル, [1924年]7月3日〔木曜〕

親愛なる友

喜んで小型本〔『汝もまた……?』〕をお送りしましょう——明日帰着するパリから。あなたが拙著からいくばくかの慰めを得られると思えば、なんと気持ちのよいことか！しかしよくよく考えてみると、嗚呼！その不十分さが気にかかります。私の友愛の情からすれば、拙著はもっと雄弁なものであれかしと思いたいところなので。

あなたのお手紙にはどれほど心を打たれることか！多分いずれはこの短信より少しはましなお返事ができることでしょう——というのは、7月末にベルギーに（おそらく、そこからならあなたと落ち合うのも難しくはないコクセッドに）寄ろうと考えておりますので。当地到着のさいにはまたお手紙を差し上げます。〔直ぐにお会いできず〕とても寂しい気持ちで御手を握ります。敬具

アンドレ・ジッド

『汝もまた……?』は、当初「緑の手帳」の名で1916年の2月から11月にかけて執筆された、ジッドの長い宗教的危機を反映する著作。匿名の非売限定版（70部、判型16×11センチ）としてプリュージュのサント＝カトリーヌ印刷所で1922年3月30日刷了したが、最初の個人的献本は6月、ごく少数の知人を対象におこなわれている（礼状などから確認されるかぎりでは、マリア・ヴァン・リセルベルグ、シュランベルジェ、モーリアック、アリーヌ・マイリッシュ、シャルル・デュ・ボスなど）。また翌年末には、おそらくは相当躊躇いながらも、かつての恐るべき「改宗勸告者」クローデルに贈っている（大使として日本に赴任中だった彼からの礼状は1924年1月12日付）<sup>44</sup>。スキュルマンズへの献本は上掲書簡の約束どおり、さほど間を置くことなく果たされる（すでに何度か言及した旧蔵書競売カタログのなかに自筆献辞入り刊本の記載あり）。

次のジッド書簡は刊本では発信地・日付のいずれも付されていない。「小型本」献呈への躊躇の表明と、前便の記述「喜んでお送りする」との対照をどう解すべきか、幾分か迷いはあるが、冒頭の「あなたに出会えなかった場合を思っいちごんての一言」が前便の「7月末のベルギー訪問の予定」への追記と捉えて、現時点では刊本の配列順に従おう——

《書簡 31》

〔発信地・日付ともになし〕

親愛なる博士にして友

あなたに出会えなかった場合を思っいちごんての一言です。

『歌の捧げもの』は見つかりませんでした——しかしその代わり、やはりあなたがご所望だと仰っていた『地の糧』を見つけました。

昨日あなたが暗に言及しておられた小型本にかんしてはまだ決心がつきません。

「心には<sup>しかじか</sup>然然の恥じらいありて (Le cœur a des pudeurs que...)」等々。匆々  
 アンドレ・ジッド

文中に挙がる『歌の捧げもの』について——。インドの詩人・思想家でノーベル賞受賞者ラビンドラナート・タゴールの代表作『ギーターンジャリ』をフランスに紹介したのがジッドであったことは一般にもよく知られている。じっさい彼が苦心のすえ仕上げた、主表題を『歌の捧げもの』とするフランス語訳は1913年の初版以来、一世紀以上にわたり定訳として広く流布し、現在はガリマール出版の中核的な叢書のひとつ「ポエジー」に収まる。ちなみに『ギーターンジャリ』原版は、タゴールが初めベンガル語で発表した韻文詩群を自らの手で英語に翻訳・編纂したもので、そのさい形式も散文に変更されている。ジッド訳もこれに倣って散文のかたちを取っている<sup>45)</sup>。

続いては「長い無沙汰」の後、スキュルマンズの手紙に応えた返書<sup>46)</sup> ——

#### 《書簡 32》

パリ, 1924年11月12日, 金曜〔水曜の誤り〕

親愛なるスキュルマンズ博士

かくも長き無沙汰がいささか不安になりはじめ、お手紙を差し上げようとしていたところ です。

愛情あふれるお手紙が届いたために、〔かえって〕私の方からの便りは遅れてしまったのです。嗚呼！ こういったお知らせはあまり愉快なものではありません……。しかし、あなたの落胆がもっと小さいと分かったならば、あなたへの親愛の念もこれほど強くはあるまいと思えます。軽薄な心の持ち主だけが浮き上がり、どんな悲しみにも身を沈めることはないのです。彼らのそういった特権を羨みますまい。如何にして立ち直るか、如何にして己の存在意義を取り戻すか、そして如何にして再び人生に妙味を見いだすのか。

「もくろんでいた生活がすべて実現できないからには！ «Since all, my life seemed meant for, fails»」。

2年前、私は何度このブラウニングの詩句を口ずさんだことでしょう……。しかるに<sup>おぼ</sup>慄ましきは、人生は続き、妥協を迫り、美も高貴さも欠けた順応や、止むを得ぬ手段を強いるということです……。哀れな友よ、あなたは自分の悲嘆と自分自身とに目を閉ざすことでしかこの泥濘から<sup>ぬかるみ</sup>抜け出すことはできません。仕事、恋愛、献身といった己を忘れさせてくれるものなら何であれ好いのです。しかしお手紙のなかで、あなたが身を委ねていると仰る「絶え間ない自己省察」ほど私を不安にさせるものはありません。そんなふう<sup>おぼ</sup>に絶えず己を見つめてしまうくらいなら、シニカルな態度を取るほうがまだましだからです。

(シモンソンの著書にかんして) 私があなたの思慮に疑念を抱きえた、そのことにま

だお悩みなのが分かるだけに、私の疑念をお伝えしたのは恥ずかしく、また悔やまれるところです。そんな考えなど寸分も持っておりません。ですから、この奇怪な一件（私が言わんとするのはシモンソンのことではなく、思い込みから私があなたを非難しかねなかったことです）からは完全に解放されてください。そして、あなたへの私の愛情には、ずっと前から一点の曇りもないことをしかとお信じください。私は〔コンゴへの〕大旅行を諦めてはおりません。だが様々な理由で出発は来年の7月まで延期せざるをえなくなりました。それが幸いして長期にわたり国を離れる前に、あなたにもまたお会いできるでしょう。その時までに元気を取り戻しておられるのをどれほど私が願っていることか！ あなたはまだとてもお若い……だからこそあなたが怖れを抱かれることは十分に分かりますが、大事なのはあくまで、あなたがご自分の価値を自ら証し立てることなのです……。まさしく心を癒やすことは肉体を癒やすのよりも難しい。〔だからこそ〕いかに微妙・繊細な治療であろうと、あなたが真に回復を決意なさった日から、倦まずそれを求め続けてください。そうしなければなりません。

この手紙の何もかもが私を冷たい無用の存在と思わせてしまいます。せめて私の真剣にして深い友愛の念だけはお疑いなきように。

アンドレ・ジッド

スキュルマンスを慰める重い語り口はどこから来るのか。彼からの「あまり愉快ではない知らせ」とは何を指すのか。確証はないものの、4年後（1928年）スキュルマンスが再婚することに照らせば（後掲《書簡36》参照）、おそらく彼はこの時期、連れ添っていた妻と離別（ただし子供たちは引き続き彼が養育）、それに伴う苦悩を書いて寄こしたのであろう（死別ならば上掲の文面は明らかに違ったものになったはず）。この書簡ばかりか後続書簡の結びから、以前のよ様な「奥様によろしく」という文言が消えるのも文通相手の離婚ゆえのことと思われる。なお文中ロバート・ブラウニングから引かれたのは詩篇「最後の遠出（The Last Ride Together）」中の一行。ただしジッドは2つの読点を落とし、また《life》を《live》と誤記している<sup>47)</sup>。さらに付言すると、彼は『コリドン』普及版の出版計画をめぐる前年の遣り取りに言及しながら、シモンソン書誌へのスキュルマンスの関与を疑っていたことを示唆するが、このこと自体はおそらくは事実の混同による勘違いである<sup>48)</sup>。

そこから4カ月後（1925年3月10日）、スキュルマンスはジッドに長い手紙を送るが、その内容を要すれば、おおむね以下のごとし——。『賈金つかい』の冒頭（『新フランス評論』同月1日号に掲載）を喜びをもって拝読、とりわけ家出をする主人公ベルナールの手紙が家庭内に巻きおこす反響の描写は出色です。



あなたやヴァレリーのような優れた作家とは異なり、凡庸な作家たち（特にヴァレリーを非難しつつ夢想的なニヒリズムに墮するシュルレアリストたち）の書くものの何と単調で味気ないことでしょうか。続けて、手術からはもう回復なさったかと質問。また、仕事を未完のまま残してのリヴィエールの夭逝がまことに痛ましい。あなたの作品については、「狭き門」叢書から刊出した小冊子『人さまざま』は実に見事<sup>49)</sup>。自分自身については、<sup>きみじか</sup>気短になってはいるものの、これまでよりも気分は安定している。子供たちの世話が重荷ではあるが、特に4歳の長女は聞き分けがよいので助かります。また、あなたが蔵書を処分するという噂だが、そのお気持ちはよく分かります。読書のためなら百冊（その内の少なくとも10冊はあなたの本）もあれば十分だと思ふことが屢々なので。サン・レジェ・レジェの『<sup>エロージェ</sup>讚』を探していますが、パリのどこかで入手できないでしょうか。彼の本名は何というのでしょうか……。

ジッドは3月初めからエリザベート・ヴァン・リセルベルグ所有の農地ラ・バステッドのあるブリニョルに滞在していたが、次の返書を送るのは翌月に入ってからのことであった――

### 《書簡 33》

ヴァール県ブリニョル, [19]25年4月2日〔木曜〕

親愛なる友

あなたの素晴らしいお手紙への返信を一日延ばしにしていました。心弾ませるようなものをと願いつつも、実際にはこんな凡庸な文章を綴らざるをえないとあっては。ですが、しばらく前から私には体力も気力もないのです。さほど大したことはない手術からは回復したものの、原因不明の目眩いのせいで、何日ものあいだ半睡状態にあります。外の世界がその一貫性と現実感を失ったかのようです。力を振り絞って、私を縛りつける重苦しい仕事（『贖金つかい』のことです）を先へ進めようとはしましたが、最後に書いた章はいつも先行する章ほどの出来ではないような気がしてしまうのです。喜びと健康が完璧な状態でないかぎり何も書きたくなくなりますが、時間が押しています。コンゴに出発する前に完成できるのでしょうか。

すでにお読みくださった部分を気に入っていただけたとはなんと幸せなことでしょう。そのことを書き送ってくださるとは、あなたはなんと好き友であることか。続きの部分があなたの失望を誘わなければよいのですが。

そうです、出発の前に蔵書の一部を売りに出します。あなたにカタログを送れるように、〔競売主催者のエドゥアール・〕シャンプイオンにお名前とご住所を渡します。カタログはあなたの興味を惹きうるものでしょう。

もしパリにいたなら、私はアレクシ・レジェ（別名サン・レジェ・レジェ、ま

たの名ジョン・ペルス)の冊子をひとつ手に取ろうとするでしょう。彼の書くものを大いに買っているのです。

まもなく出る『新フランス評論』誌で、私が提供したリヴィエール書簡6通をお読みください。深く感動なさるのは間違いありません。

さようなら。私の変わらぬ友愛の念をお信じください。

アンドレ・ジッド

第1段落の「さほど大したことはない手術」とは、ジッドが前年末にパリで受けていた虫垂炎手術のこと(それでも術後は半月ほど入院生活)。書簡の2カ月後(6月8日)、難航を続けていた『贗金つかい』をようやく脱稿した彼は、7月14日マルク・アレグレとともに念願のコンゴ旅行に出発することになるが、それに先立ち、旅行資金捻出のためもあって蔵書の一部(405点の自筆署名入り献本や手稿など)を競売に付す。その際、あろうことか自ら目録に序文を寄せさえするのである<sup>50)</sup>。すでに押しも押されもせぬ大作家の地位を獲得してただけに、この一件は文壇内部にとどまらず、広く一般に大きな波紋を投げたが、ジッド自身にとっては明らかに過去との訣別を内外に示す象徴的行為でもあった<sup>51)</sup>。なお、文末に挙がるジッド宛のリヴィエール書簡は、『新フランス評論』の編集長としての貢献を称えて編まれた大部な追悼特集号(4月1日付だが、発行は数日遅れたか)に掲載される。また同号には、ジッド(あるいはポーラン)の仲介により、医師としての見地から綴られたスキュルマンズの短文「ジャック・リヴィエールの臨床的精神」も「外国人たちの証言」のひとつとして掲載されている<sup>52)</sup>。

スキュルマンズは直ちに返書で謝意を表した(4月4日付書簡)。ひとはジッドの応接の悪さを責めるが、これらの手紙がどれだけの喜びを私に与えてくれることか、と。そして「原因不明の目眩い」に苦しむジッドを案じつつ、『贗金つかい』の続きを一刻も早く読みたいので、なおのこと御身大切にと願う。また、『新フランス評論』から自分に寄稿依頼が来たのはジッドのお陰に外ならぬとも。また、士気は以前よりは少し上がっており、仕事と気晴らしに努めているが、もはや読書はほとんどできず、さらに悪いことには何事にも無関心になった気がする。と述べたうえで、直ぐには近況を伺えませんが、あなたが私をお忘れでないのは何にもまして大きな喜びだと結んでいる。

だがそれから2年近くは両者の交流は確認されていない(同期間中には1926

年の2月に『贖金つかい』が刊出、5月にジッドは10カ月の長旅の後フランスに帰国)。じっさい1927年2月5日付のスキュルマンズ書簡は「長い無沙汰」を詫げることで始められている——「何度となくお手紙を差し上げようと思いましたが、日々の雑事に追われ日延べを繰り返しておりました。〔『新フランス評論』で〕『コンゴ紀行』の最新の断章を読んだのを機に、私のことを思い出していただくと思った次第」。そう断ったうえでスキュルマンズは、コンゴでジッドが親しくなった少年アドゥムが罹った「横根 (budon)」は、症状から判断するに、作家の言うような梅毒性のものではなく<sup>53)</sup>、むしろ軟性下疳だろうと医師としての見解を述べる。また、前年10月ジッドが『一粒の麦』の普及版(3巻本)を公刊したことにたいし、その「驚嘆すべき勇氣」をことのほか称えている。自分の近況としては、成長する子供たち、増える患者に囲まれ、精神的に弛緩した生活は相変わらず味気ない。資産は増えても、士気は上がらぬまま。それだけに、あなたからの本物の善意だけが心の支えである、と。

この便りにたいし、10日後ジッドが送った返信——

#### 《書簡34》

[パリ、1927年2月15日]火曜

親愛なる友

このところ、あなたに想いを馳せることが多く、まさにお手紙の到来を予感していたところです。そうでなければ私のほうから便りを差し上げたことでしょう。

ご自身のことはほとんどお話しになりません。その僅か数行でご様子を窺い知ることはできますが……。私のほうとて、変わらぬ我が想いをお信じいただけるよう、友情をこめた数行ばかりをお送りする時間しかありませんが。

アドゥムの横根の話にかんしては、まったくお説のとおりであり、あなたの診断に喝采を送ります。〔現地の行政官代理で、医学を修めてはいたが〕とんだはったり屋の〔フェルナン・〕ラ・バルブは我々をだましたのです。そして驚くべきは、誤診されるのを完全に分かっていながら、アドゥムがされるがままにしていたことです。このことを私は後のほうで語っていますが、注意深い読者を納得させるために、直ぐに註で書いておくべきだったのでしょうか。

『一粒の麦もし死なずば』とその出版にかんするご意見にはとりわけ感じ入りました。しかしながら「勇氣」なぞとは仰らないでください。もはや私にはこの語の意味がよく分からなくなっています。あなたにお会いしなくなってから私はほとんど「死後の」<sup>ポスタム</sup>存在となっているのです……。それについては再び相見え<sup>あいまひ</sup>たときにお話ししましょう。あなたになら胸襟を開いてお話しできるからです。

さようなら。私の変わらぬ友愛の念をお信じください。

アンドレ・ジッド

スキュルマンズからの再婚予定の通知など、遺失分の存在は明らかなものの、これ以後は頻繁に手紙が遣り取りされたとは考えにくい。おそらく翌年6月初旬の書簡はジッド側からの久々の便りであったろう。このとき彼はマルク・アレグレが撮影した映画『コンゴ紀行』の紹介のためブリュッセルで講演をしたばかりであった（そのテキストは同月下旬の『レ・ヌーヴェル・リテレール』紙に掲載される<sup>54)</sup>）——

《書簡 35》

パリ、1928年6月4日〔月曜〕

親愛なる我が友

おそらくドラークル夫人〔前出の演出家・俳優ジュールの妻アンヌ＝マリー〕から電話をお受けになられたことでしょう。早朝にブリュッセルを発つので、彼女にはあなたとお会いできぬ悔やみをお伝えするよう頼んでおいたのです。多分ご存じだったでしょうが、講演を済ませるや直ぐにブリュッセルを離れ、オランダからの帰途、同市はただ通り過ぎるだけだったのです。あなたがいつも示くださったご厚情に私がどれほど好感を抱いてきたか、またあなたのお心が晴れやかであるのを知ってどれほど喜んでいるか、そういったことを申し上げられれば嬉しかったのですが。どうして私の講演の後、お見えにならなかったのですか。あなたと握手を交わせれば大いなる喜びとなったでしょうに。ご婚約者に私の心からの贅辞と、また直ぐにお知り合いになれず残念であった旨をお伝えいただきたく。敬具

アンドレ・ジッド

10日ほどのうちに、有難くもご所望くださった、私がディンディキと一緒に写ったあの肖像写真をお送りできるだろうと思います。

追伸について補説しておく、「ディンディキ」とは中央アフリカに生息するキツネザル科の（だがむしろリスに似た）小動物の通称で、ジッドはコンゴ旅行中、たまたま贈られた一頭<sup>いた</sup>を甚く可愛がった。その人懐こく愛くるしい姿と死までの様子を綴った小冊子が前年リエージュの「アラジンのランプ」から出版されている（プレオリジナルは『コメルス』誌の1926年秋号に掲載<sup>55)</sup>）。ジッドがこの小動物をマフラーのように襟首に巻いた写真は翌年（1929年）、マルク・アレグレ撮影の写真64葉を付した大型贅沢版『コンゴ紀行』（『チャド湖より帰る』を併載）に収まることになるが<sup>56)</sup>、スキュルマンズは先述の映画紹介のさいにこの写真を目にし、焼付け画像の所有を望んだのであろう。

同年8月、ジッドはオートゥイユ（現在はパリ16区）の屋敷「ヴァイラ・モンモランシー」から7区ヴァノー通り（1番地<sup>ビス</sup>乙）のアパルトマンに転居し、ヴァ

ン・リセルベルグ夫妻の隣人となる<sup>57)</sup>。次は引越最中の慌ただしさのなかで綴られた書簡。存在の確認された最後の書簡でもある――

《書簡 36》

[パリ], 1928年8月13日〔月曜〕

親愛なる友

あなたに私の想いやお祝い、祈りの気持ちをお送りするには遅すぎるでありましょう。書類の山のなかから、ご結婚の通知状が出てきましたが、〔申し訳ないことに〕転居のごたごたで当初は気がつかないでいたのです。

私の方の無関心や怠慢、あるいは忘却とっておられるのだらうと困惑しています。すでに私は直近のブリュッセル旅行のさいにあなたと再会できなかったことを悲しんでおりました。そのことは手紙でお知らせしていたと思います。嗚呼！この通知状には新しいご住所が記されていません。しかしながら、この寸書があなたのもとに届き、私の変わらぬ共感を証し立ててくれることを願っております。

どうか奥様によろしくお伝えください。敬具

アンドレ・ジッド

＊

8年ほどは維持された両者の文通関係だったが、これが以後も長く続いたとは思われない。じっさい筆者の承知するかぎり、爾来1951年の死去までジッドが第3者に宛て発信した5,000通近い書簡にも、またその日記や随想にもスキュルマンズの名が挙がることはただの一度もないのである。如何なる理由による終焉だったのか。如何なる人生の機微が介在しての結末だったのか、今となつては最早それを知る術<sup>すべ</sup>はない。したがって筆者としては実証の根拠を欠く推測は慎み、拙い論述に終止したとはいえ、刊本収載書簡の紹介という本稿の目標はまがりなりにも達成したと考え、これをもって筆を擱くこととしたい。

註

- 1) Voir Pierre MASSON, «État présent : Les correspondances d'André Gide», *Épistolaire. Revue de l'A.I.R.E.*, n° 33, 2007, p. 275.
- 2) Voir *Vente publique de la Bibliothèque du Docteur Willy Schuermans*, Bruxelles : Galerie Falmagne [expert : Raoul Simonson], 1956, 2 fasc. [première partie, 21 janvier 1956 ; seconde partie, 3 mars 1956].
- 3) Voir André GIDE, *Lettres au Docteur Willy Schuermans (1920-1928)*. Bruxelles :

- s. n. éd. [Raoul Simonson], 1955 [訳出にあたっては、煩瑣なれば各書簡の出所頁は逐一指示しない]。ちなみにシモンソン旧蔵の同書刊本には、当時ジッドの遺児カトリーヌと婚姻関係にあったジャン・ランベールや、マリア・ヴァン・リセルベルグ、ジャン・シュランベルジュ、ロジェ・マルタン・デュ・ガールら作家の盟友たちからの礼状が付されており、事前許諾の有無は不詳ながら、この私家版出版が彼らの大いに喜ぶところであったことが分かる (voir le catalogue de la vente publique de la librairie Alain Ferraton, 26 février 2017, item n° 978)。また前註記載の目録のとおり、この翌年にはスキュルマンズの蔵書はシモンソンを鑑定人として競売に付されることになるが、彼宛のジッド書簡については別途売却されたらしく、2014年にはその内14通が市場に現れている (voir le catalogue de la vente publique organisée par la même librairie, 10 mai 2014, item n° 264)。
- 4) Voir André GIDE, « Si le grain ne meurt... (fragment) », *La NRF*, 1<sup>er</sup> février 1920, pp. 157-183; 1<sup>er</sup> mars 1920, pp. 405-425; 1<sup>er</sup> mai 1920, pp. 645-669; 1<sup>er</sup> novembre 1920, pp. 744-764; 1<sup>er</sup> décembre 1920, pp. 811-838; 1<sup>er</sup> janvier 1921, pp. 39-66. これら6回の雑誌掲載は、後述する私家版刊本第1巻の第1部第1-6章に当たるが、そこでの削除は刊本テキストの1割強に上った。
  - 5) 次の段落に続く2段落の記述はフランソワ・シャポンの論考に負うところが大きい。Voir François CHAPON, « Note sur l'édition du second *Corydon* », *Bulletin du bibliophile*, 1971, n° 1, pp. 1-9; *Mystère et splendeurs de Jacques Doucet*, Paris: Jean-Claude Lattès, 1984, pp. 252-254 [nouvelle éd. revue et corrigée: *C'était Jacques Doucet*, Paris: Fayard, 2006, pp. 366-368].
  - 6) アルノルド・ナヴィル作成のジッド著作目録によれば『コリドン』初版の部数は21ないし22 (voir Arnold NAVILLE, *Bibliographie des écrits de André Gide*, Paris: Chez H. Matarasso, 1949, p. 47, item n° XXXIV)。いっぽう同書各版の校訂版を作成したアラン・グーレはジッド自身の記述に依り12部を最も妥当な数と見なしている (voir *Les « Corydon » d'André Gide*, présentés par Alain GOULET avec le texte original du *C.R.D.N.* de 1911, Paris: Orizons, 2014, p. 23, n. 32)。本稿では後者の説に従う。
  - 7) この初版については以下を参照—— André GIDE, *La Symphonie pastorale*. Édition établie et présentée par Claude MARTIN, Paris: Lettres Modernes Minard, coll. « Paralogue », 1970, pp. CXLIX-CL.
  - 8) ジッドが1919年に知り合ったミシュレは、当初から自身の同性愛指向を隠すことがなかった。それだけに一層の親近感を抱いて彼に接したジッドは『コリドン』の私家版第2版を与えていたが、青年の大胆な言動はやがて官憲の見咎めるところとなる (未成年への遊蕩教唆にたいする逮捕状請求)。当該私家版や少なからぬジッド書簡が押収されることを怖れた彼からの救援要請にたいし、ジッドは1921年6月ブリュッセルに赴き尽力、その甲斐あってこの「ルネ・ミシュレ事件」は何とか事なきを得ていたのである (voir Maria VAN RYSSELBERGHE, *Les Cahiers de la Petite*

*Dame*, 4 vol., Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n<sup>os</sup> 4-7, 1973-1977, t. I, pp. 86-87 [14, 18 et 27 juin 1921]). ミシュレと『コリドン』私家版第2版については後註48も参照。

- 9) Voir *Vente publique de la Bibliothèque du Docteur Willy Schuermans*, *op. cit.*, première partie, p. 29, item n<sup>o</sup> 285. ただし目録の記述によるかぎり、この刊本にジッドの自筆献辞は入っていない。
- 10) 以後折りに触れて言及するジッド宛スキュルマンズ書簡14通はすべてパリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫 (BLJD) の所蔵。煩瑣なれば各書簡の日付と同文庫の整理番号をここに一覧として掲げる (発信地はいずれもブリュッセル) ——
  1. 09-05-1921, γ 412-1.      2. 14-05-1921, γ 412-2.      3. 16-06-1921, γ 412-3.
  4. 03-07-1921, γ 412-4.      5. 16-08-1921, γ 412-5.      6. 15-09-1921, γ 412-6.
  7. 17-11-1921, γ 412-11.    8. 18-12-1922, γ 412-10.    9. 01-12-1923, γ 412-7.
  10. 05-12-1923, γ 412-8.    11. 01-07-1924, γ 412-13.    12. 10-03-1925, γ 412-12.
  13. 04-04-1925, γ 412-9.    14. 05-02-1927, γ 412-14.
- 11) Voir André GIDE, « Billets à Angèle », *La NRF*, 1<sup>er</sup> avril 1921, pp. 462-466. とりわけその冒頭は「『新フランス評論』は多くの読者、友人たち、しかも最良の友人たちを失望させた」と、かなり直裁な一文で始まっていた。
- 12) Voir ALAIN, « Mars ou la guerre jugée », *La NRF*, 1<sup>er</sup> mai 1921, pp. 527-552.
- 13) Voir André GIDE, « Préface à *Armance* », *La NRF*, 1<sup>er</sup> août 1921, pp. 129-142. ただしこの序文が単行版『アルマンズ』に収められるのは5年後のことである (voir STENDHAL, *Armance*. Texte établi et annoté par Raymond LEBÈGUE. Préface de André GIDE, Paris : Librairie ancienne Honoré Champion / Édouard Champion, 1925)。
- 14) Voir « Une campagne éditoriale d'André Gide (1918-1923). Lettes à Édouard Verbeke ». Édition établie, présentée et annotée par Pierre MASSON, *Bulletin des Amis d'André Gide*, n<sup>o</sup> 143/144, juillet-octobre 2004, pp. 376-378.
- 15) Voir Maria VAN RYSELBERGHE, *Les Cahiers de la Petite Dame*, *op. cit.*, t. I, p. 102 [25 août 1921]. ちなみに同日の記述には、ジッドがアルロンに向かう車中でマリアとその娘エリザベートに「スキュルマンズ医師に借りた官能性にかんする本」を読んで聞かせたとある (*ibid.*, pp. 102-103)。
- 16) ジッド自身が『嵐が丘』を初めて読んだのは1893年の2月から3月にかけてテオドール・ド・ヴィゼヴァのフランス語訳 (『ある恋人 (Un Amant)』, ペラン社, 1892年) によって (voir Jacques COTNAM, « Le "Subjectif" ou les lectures d'André Walter (1889-1893) », in *Les débuts littéraires d'« André Walter » à « L'Immoraliste »*, Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n<sup>o</sup> 1, 1969, p. 62), また具体的な感想を記したのは『レルミタージュ』誌1899年6月号掲載分の「アンジェルへの手紙」においてである (voir André GIDE, « Lettre à Angèle », *L'Ermitage*, juin 1899, p. 457)。

- 17) Voir André GIDE, «Conversation avec un Allemand quelques années avant la guerre», *La NRF*, 1<sup>er</sup> août 1919, pp. 415-423 [repris dans *Morceaux choisis*, *op. cit.*, pp. 41-429].
- 18) Voir André GIDE, *Morceaux choisis*, Paris : Éd. de la Nouvelle Revue Française, 1921. 前年1月末のドロシー・ビュッシー宛書簡でジッドは次のように記している——「2冊の『選文集』<sup>パーシュ・ショワジ</sup>を準備しているところです。ひとつ〔クレス版〕は青少年向け！もうひとつは新フランス評論から出る、あらゆる年齢層に向けたものです。私はこちらのほうに大きな重要性を認めています、またひどく難儀もしています（未発表の文章をたくさん入れます）」(Lettre de Gide à Dorothy Bussy, du 31 janvier 1920, dans leur *Correspondance (1918-1951)*. Édition établie et présentée par Jean LAMBERT, 3 vol., Paris : Gallimard, coll. «Cahiers André Gide» n<sup>os</sup> 9-11, 1979-1982, t. I, p. 168)。
- 19) Voir André GIDE - Jacques RIVIÈRE, *Correspondance (1909-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre de GAULMYN et Alain RIVIÈRE avec la collaboration de Kevin O'NEIL et Stuart BARR, Paris : Gallimard, 1998.
- 20) Voir «Une campagne éditoriale d'André Gide (1918-1923). Lettes à Édouard Verbeke», art. cité, p. 379.
- 21) Voir André GIDE, «Les Rapports intellectuels entre la France et l'Allemagne», *La NRF*, 1<sup>er</sup> novembre 1921, pp. 513-521 ; Ernst Robert CURTIUS, «Deutsch-französische Kulturprobleme», *Der Neue Merkur*, juin 1921, pp. 145-155. またこれに先だっては10月、『レ・ゼクリ・ヌーヴォー』誌に戯曲『アヤックス』の第1幕が掲載されている。
- 22) Henri MASSIS, «L'Influence d'André Gide» [compte rendu de *Morceaux choisis*], *La Revue universelle*, 15 novembre 1921, pp. 503 et 509, n. 2 (repris dans *Jugements II*, Paris : Plon-Nourrit et Cie, 1924, p. 14, et *André Gide*, Paris : Lardanchet, 1948, pp. 73 et 263, n. 164).
- 23) ジッドとマシスとの関係については、拙著『ジッドとその時代』、九州大学出版会、2019年、第IV部第2章「ジッドとアンリ・マシス——1924年の論争を中心に——」(413-430頁)を参照。
- 24) Voir les lettres de Gide à Verbeke, des 1<sup>er</sup> et 2 janvier 1922 («Une campagne éditoriale d'André Gide (1918-1923). Lettes à Édouard Verbeke», art. cité, pp. 382-383).
- 25) 『ユリシーズ』の英語完全版がパリのシェイクスピア・アンド・カンパニーから出版されるのは翌月2日のこと。だが、これに先立ち1918年3月から1920年末にかけて、全体の8割ほどがアメリカの雑誌『ザ・リトル・レビュー』に連載されており、ジョイスの愛読者で英語の堪能なスキュルマンズがそれに目を通していた蓋然性がゼロだとは言いきれない。
- 26) Voir André GIDE, «La Conception esthétique de Valéry», *Le Divan*, mai 1922,



- pp. 205-211.
- 27) Voir André GIDE, «L'Avenir de l'Europe», *Revue de Genève*, n° 6, janvier 1923, pp. 1-9.
- 28) Voir André GIDE, «Voyage en littérature anglaise», *Verve*, printemps (mars-juin) 1938, vol. 1, n° 2, pp. 14-15.
- 29) André GIDE - Dorothy BUSSY, *Correspondance (1918-1951)*, *op. cit.*, t. I, pp. 334-335 et 339.
- 30) なおジッドとジョイスの関係については、実証的な調査・探索が必ずしも十分であるとは言えないが、とりあえずは次の論文を参照—— Georges MARKOW-TOTEVY, «André Gide et James Joyce», *Mercure de France*, 1<sup>er</sup> février 1960, pp. 272-290.
- 31) Voir [Trad. par André GIDE,] «Hamlet (Acte Premier)», *Échanges*, n° 1, décembre 1929, pp. 3-32; puis, revue et corrigée, dans William SHAKESPEARE, *Le premier acte de Hamlet, prince de Danemark*, traduit par André GIDE, précédé de la traduction, Paris: Éd. de «La Tortue», 1930. なお、戯曲全編の出版は1944年まで待たなければならぬ (voir *Hamlet*, édition bilingue, trad. nouvelle de GIDE, New York: Jacques Schiffrin, Pantheon Books, 1944)。
- 32) Voir le catalogue *Vente publique de la Bibliothèque du Docteur Willy Schuermans*, *op. cit.*, seconde partie, p. 30, item n° 650. このジッド宛ヴァレリー書簡は、ピーター・フォーセットが編纂・校訂した網羅性の高い『ジッド=ヴァレリー往復書簡』にも記載されていない (voir André GIDE - Paul VALÉRY, *Correspondance (1890-1942)*. Nouvelle édition établie, présentée et annotée par Peter FAWCETT, Paris: Gallimard, coll. «Les Cahiers de la NRF» / «Cahiers André Gide» n° 20, 2009)。書簡 552 bis として採録されるべきもの。
- 33) 11月9日付ジッド宛ヴァレリー書簡——「スキュルマンス書簡をありがとう。直ちに返事を出し、直ちに——《承諾シタ *accepted*》と。だが、まだ何も返答はない」(leur *Correspondance (1890-1942)*, *ibid.*, pp. 856-857)。
- 34) Fragment de lettre cité par Michel JARRETY, *Paul Valéry*, Paris: Fayard, 2008, p. 540. なお、すでに何度か言及したスキュルマンス旧蔵書競売目録には、ヴァレリーがスキュルマンスに宛てた計18通の書簡やハガキも出品されていた (*op. cit.*, item n° 651. ただし12月6日付書簡〔現在セットのメディアアテックが所蔵〕がこのなかに含まれていたかは不詳)。その多くは詩人のベルギー講演に深く関わるものであるだけに、本文の補説もかねて目録の記述を原文で引用しておこう——
651. VALÉRY (P.) Correspondance avec le Docteur Schuermans. Lot de 13 lettres avec enveloppes et 5 cartes postales. On y joint une lettre de 4 pp. avec signature de Madame Paul Valéry, portant deux lignes de la main de Valéry et deux lettres dactylographiées de Gaston Gallimard au Docteur Schuermans. Intéressante correspondance relative surtout à l'organisation de conférences en Belgique. Paul Valéry se plaint à maintes reprises de sa santé, de sa fatigue et

de la vie qu'il mène. Il semble écrire et donner des conférences sans beaucoup d'enthousiasme.

De nombreux passages seraient à citer et montrent à nu l'âme désabusée de l'auteur de *La Jeune Parque* : «Voici quatre semaines que je suis à la chambre. L'hiver m'a fait échec dès le début de ses rigueurs ! Je suis éreinté et vieux comme la lune... Et puis tant d'encombrement mental, d'ennuis et vaines complications. Paris me mord de toutes parts. Pas de carrière plus bizarre que la mienne ! Devenir sur le tard une espèce d'homme public — à cause d'une œuvre secrète ! Se trouver dans des histoires auxquelles jamais on n'aurait même rêvé qu'on y trempât un jour... Avoir affaire aux femmes, aux Académiciens, aux journaux, aux éditeurs, etc... quand on avait navigué depuis l'origine toujours vers le point opposé du globe social.»

Il écrit aussi : «Figurez-vous que je n'ai plus une heure à moi dans la journée, que l'on me presse d'ailleurs d'écrire, c'est-à-dire de faire ce qui m'ennuie le plus au monde ! et qu'il le faudrait puisque je n'ai que cette triste ressource...»

On y joint le faire-part imprimé du mariage de Mademoiselle Valéry.

- 35) Voir JARRETY, *op. cit.*, p. 540.
- 36) 同書簡でスキュルマンズは、シュランベルジェの面識を得、短時間ながらも会話を交わした喜びにも言い及んでいる。そのさいに覚えた作家の印象は「きわめて感じが好き、ただ作品を作り出すだけの機械なぞではなく、稀有なまでの人間らしさを備えた人物」と、手放しの賞賛であった。スキュルマンズから報告をうけたジッドは間をおくことなく、自作の終演に立ち会うためブリュッセルに赴こうとしていたシュランベルジェ本人にその内容を伝えている (voir la lettre de Gide à Jean Schlumberger, du 20 décembre 1922, dans leur *Correspondance (1901-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Pascal MERCIER et Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, 1993, p. 762)。
- 37) 以下に言及するジッド宛シモンソン書簡はいずれもジャック・ドゥーゼ文庫現蔵 (BLJD, γ 427-3, 427-1, 427-2)。なおシモンソンの経歴については次の論考に詳しい——Carine DEPRez et Bruno LIESEN, «Raoul Simonson (1896-1965), libraire, bibliographe et éditeur», *Le Livre et l'Estampe*, janvier 2014, pp. 1-75.
- 38) 『イザベル』の刊本は16折小型の豪華紙限定初版(500部)と12折普及版との2種が準備されたが、5月29日刷了の前者には誤植にくわえ、数頁に行数の不揃いが見つかったため、その大半がジッドの指示により廃棄された。その後、組版を再調整したいわゆる「第2初版」の印刷は結局、普及版のそれと同じ6月20日まで延期された。ちなみに、5月29日刷了分のうち処分を免れたのは、ジッドとともに廃棄作業に関わったガストン・ガリマールの証言では「新フランス評論出版の記録資料用6部のみ」(voir la lettre de Gaston Gallimard à M. Méric, du 24 juillet 1916, fac-similé reproduit dans la *Bibliographie des Éditions de la Nouvelle Revue*

- Française (1911-1919)*, Paris : Henri Vignes livres anciens, 1997, n. p.), あるいは従来のジッド書誌によれば「10部程度」とされるが、筆者がこれまで古書店カタログや競売目録等で確認しえた実数から見て、おそらく20部前後はあったものと推測される。また行数が不揃いなのは3頁というのが通説として各所に繰り返し記されるが、実際には10頁である。
- 39) Voir Robert DORÉ et Raoul SIMONSON, *Les Livres d'André Gide*. Avec un Fragment inédit de l'auteur. Paris : Les Amis d'Édouard (n° 51), 1923.
- 40) この12月5日付ジッド書簡の存在は、後述の22日付シモンソン書簡のなかでの言及(«votre lettre du cinq»)によって確認できる。
- 41) シモンソンはこの共著版書誌(前註39参照)に続き、その増補改訂版を準備していた1924年6月22日、ジッドに『コリドン』の書誌情報(とその記載許可)を求めて次のように書いている——「私は『エドゥアールの友』叢書からあなたの著作書誌を出版しましたが、その際あなたは私に『コリドン』[私家版]は記載しないよう依頼なさいました。しかし今はもうそうした要望は持つてはおられまいと思いますので、云々」(lettre de Simonson à Gide, du 20 juin 1924 [BLJD, p. 427-4])。ジッドは今回は譲ったようで、同年10月刷了の増補改訂版には『コリドン』の普及版(1月刷了, 5月発売)が記載され、シモンソンが「未だ実見できないでいる」2つの私家版についても、おそらくは著者から得た情報が付記されている(voir Raoul SIMONSON, *Bibliographie de l'œuvre de André Gide (1891-1924)*, Maastricht : Boosten & Stols, 1924, pp. 38-39)。ちなみにシモンソンは当該普及版については次のような一文を添えていた——「同版は、著者が依然として出版を大いに躊躇していたため、6月半ば[ママ]まで発売されなかった」。これにたいしジッドは事後、次のように不満を表明している——「私を幾分か不快にさせる記述があります。私が長らく躊躇していた、そうあなたは仰る。これでは私は優柔不断な性格だと思われてしまう。これ以上の誤りはありません。ただ単に私は適切な時期を待っていただけです。[普及版の公刊によって]『一粒の麦もし死なずば』を解き放つべく今もなおそうしているように」(fragment de lettre de Gide à Simonson, [octobre] 1924, cité dans le catalogue de la vente *Bibliothèque littéraire Raoul Simonson / Albert et Monique Kies*, Paris : Sotherby's, 12 décembre 2013, p. 109, item n° 524 [2.2])。
- 42) André GIDE, *Journal, I (1887-1925) ; II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY et Martine SAGAERT, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996-1997, t. I, pp. 890 et 895 [26 septembre et 8 octobre 1915].
- 43) Voir Daniel MOUTOTE, «L'Angleterre émancipatrice dans l'œuvre d'André Gide : *Autobiography of Mark Rutherford, Deliverance, Catharine Furze*», in *Gide et l'Angleterre*, Londres : Birkbeck College, 1986, pp. 104-111.
- 44) Voir la lettre de Paul Claudel à André Gide, du 12 janvier 1924, dans leur *Corres-*

- pondance* (1899-1926). Préface et notes par Robert MALLET, Paris : Gallimard, 1949, pp. 240-241.
- 45) ジッド訳『歌の捧げもの』の成立過程については、前掲拙著『ジッドとその時代』、第三部第4章「ジッドとタゴール——『ギターーンジャリ』 フランス語訳をめぐって——」(377-391頁)を参照。
- 46) 書簡の日付について一言——。ジッドは10月23日から12月3日までキュヴェルヴィルに滞在していたが、日付と発信地「パリ」の不整合に注目したクロード・マルタンは、既刊書簡の全テキストを入力した膨大な情報量の非売電子版 (voir André GIDE, *Correspondance générale* (1879-1951). Textes réunis et classés par Claude MARTIN, La Grange Berthière : [Chez l'éditeur], 2009) において、「12日、金曜」の記述と照応する「9月12日」を正しい日付と見なし、「パリ」には«*sic*»を付す。だが彼はジッドが当該期間中、11月11日から18日までパリに一時帰着したことを見落としている。作家が屢々おかし<sup>しほしば</sup>単なる曜日記述の誤り（〔金曜〕ではなく「水曜」）と考えるほうが蓋然性・整合性ははるかに高かるう。
- 47) 訳文は、富士川義之訳『ブラウニング詩集——イギリス詩人選(6)』、岩波文庫、2014年、175頁から借用。ちなみにブラウニングは早くからジッドに大きな影響を与えていた。これについては次を参照—— Bernard BRUGIÈRE, *L'Univers imaginaire de Robert Browning*, Paris : Klincksieck, 1979.
- 48) シモンソンが『コリドン』の存在（とその普及版出版の計画）を知っていたのは、まず間違いなく前出のルネ・ミシュレを通じてのこと。すでに引いた1924年6月22日のジッド宛書簡には次のような記述がある——「申し訳ありませんが、〔2つの『コリドン』私家版について具体的な書誌情報を〕お願いします。というのもブリュッセルには、内ひとつ〔1920年の増補版〕を所有している友人のルネ・ミシュレしか知り合いがおらず、しかも今のところ彼はそれを私に貸すことができないのです」。
- 49) Voir André GIDE, *Caractères*, Paris : À l'enseigne de la Porte étroite, 1925 [le premier volume, achevé d'imprimer le 5 février 1925, de la collection « La Porte Étroite » dirigée par Madeleine de Harting].
- 50) Voir *Catalogue de Livres et Manuscrits provenant de la Bibliothèque de M. André Gide*. Avec une préface de M. André Gide. Vente des lundi 27 et mardi 28 avril 1925 (Hôtel Drouot), Paris : Édouard Champion, 1925, p. 5.
- 51) この競売の詳細については、前掲拙著『ジッドとその時代』、第四部第3章「蔵書を売るジッド——1925年の競売——」(431-442頁)を参照。
- 52) Voir Jacques RIVIÈRE, «Lettres à André Gide», *La NRF* («Hommage à Jacques Rivière»), 1<sup>er</sup> avril 1925, pp. 758-780 ; D<sup>r</sup> W. SCHUERMANS, «L'esprit clinique de Jacques Rivière», *ibid.*, pp. 686-687.
- 53) Voir André GIDE, «Voyage au Congo : De Nola à Babuda», *La NRF*, 1<sup>er</sup> février 1927, pp. 180-220 [surtout la description du 27 novembre, aux pp. 217-219].

- 54) Voir « André Gide et le cinéma » [texte de la causerie qui accompagnait la présentation du film sur le Congo, tourné par Marc Allégret], *Les Nouvelles littéraires*, 23 juin 1928, p. 1, col. 3-4.
- 55) Voir André GIDE, *Dindiki*, Liège : Éd. de la Lampe d'Aladdin, 1927 (après le texte préoriginal paru dans *Commerce*, automne 1926, cahier IX, pp. 41-59).
- 56) Voir André GIDE, *Voyage au Congo, suivi du Retour du Tchad* [édition de luxe illustrée, ornée de 64 photographies de Marc Allégret et de 4 cartes], Paris : Gallimard, 1929, p. 220 bis.
- 57) 付言すると、ジッドと夫妻は隣接する壁を改造、そこにドアをつけて2世帯が容易に行き来できるようにし、毎日のように食事をともにするほどの間柄となった。とりわけ妻マリアの『プチット・ダムの手記』の大半はこの環境から生まれたもので、身近で生活する作家の日々の言動をなんと30年以上にわたって、しかも当人にはまったく気づかれることなく記録し続けたのである。エッカーマンの『ゲーテとの対話』にも比すべきこの膨大な記録が第一級の同時代資料となったのは周知のとおり。かくして、このアパルトマンがジッドにとって終の住処となるわけだが、いっぽう妻のマドレーヌはこれ以後はほとんどキュヴェルヴィルを離れなくなる（上京に際してもサン＝ラザール駅近くに宿をとるのが常となる）。夫婦の関係においても大きな意味をもつ転居であった。